

| | |
|---------------|---|
| Title | モンゴルが遺した「翻訳」言語—旧本『老乞大』の 発見によせて—(下) |
| Author(s) | 宮, 紀子 |
| Citation | 内陸アジア言語の研究. 19 p.157-p.209 |
| Issue Date | 2004-07 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/16472 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

モンゴルが遺した「翻訳」言語 —— 旧本『老乞大』の発見によせて —— (下)

宮 紀子

- 一. はじめに —— 直訳体と漢児言語の研究史
- 二. 金から大元ウルスにかけての口語漢語
 - (1) 南宋からみた華北の口語漢語
 - (2) 華北からみた口語漢語
- 三. 直訳体の登場
- 四. 高麗における直訳体の受容
(以上前号)
- 五. 大明時代の翻訳システム —— モンゴルの遺産 I
 - (1) 明初期の国書
 - (2) 四夷館の翻訳
- 六. 李朝の語学教育 —— モンゴルの遺産 II
 - (1) 高昌悞氏と司訳院
 - (2) 大明国と朝鮮の冷たい外交
—— モノと言語の断絶
 - (3) モンゴル語教材について
- 七. 旧本『老乞大』 —— むすびにかえて

五. 大明時代の翻訳システム —— モンゴルの遺産 I

(1) 明初期の国書

『高麗史』に収載される明太祖の初期の詔が、モンゴル時代と同じ直訳体で記録されていることは、従来から知られていたが、最近、寺村政男、黄時鑑が元末明初の口語漢語の資料として取り上げた。⁽²⁷⁾ もっとも、寺村はこれが明太祖の生の言語なのか、高麗側の通事の翻訳言語であるのか、最終的な判断は保留している[寺村 1998]。黄時鑑は、“直訳体は大元時代の口語に対し重大にして深

(27) 『高麗史』卷四三「恭愍王世家六」壬子二十一年五月癸亥，九月壬戌，卷四四「恭愍王世家七」癸丑二十二年秋七月壬子，卷一三五「辛禡伝三」十一年十二月，卷一三六「辛禡伝四」十二年七月，十三年五月等。

遠な影響を及ぼし、さらには朱元璋が皇帝に即位したのちでさえ、かれの口論は相変わらずこの文体を以て説かれた”という[黄 2001, p. 552]. すなわち、この言語が直訳体から生み出された実用の口語であり、朱元璋もじつさいにこの言語を喋っていたと解釈するのである。また、船田善之は、佐藤晴彦・竹越孝等の「漢児言語」論を踏まえ、これを直訳体が当時の華北の口頭語に近い形で作られた証左とした[船田 1999]⁽²⁸⁾。しかし、実は、この資料こそ直訳体がじつさいに話される口語ではなかったことを示す証拠にほかならない。

明太祖の詔が直訳体をもって書かれた例は、『高麗史』に限らない。たとえば、明朝廷から高麗、李氏朝鮮に宛てた文書を集めた『吏文』巻二にも“欽みて検し到るに、洪武五年七月二十五日の早朝、奉天門に、陪臣張子温の欽奉せる宣諭聖旨の節該に；我聴き得たるに；女直^{たち}毎^{おまえら}は^い恁^{かれら}の地面の東北に在り、他毎^あは古^{いにしえよ}自^{おをまもらぬの}り豪傑にして、不^{おまえら}是^い守分の人で有る。恁^には去^{いて}つて国王根底説^あつ着用心し隄防^{せげ}者。此を欽しめ”とある。⁽²⁹⁾ だが、これらが太祖の生のことばであつたはずがない。『高麗史』、『吏文』の大部分は、普通の口語、もしくは吏牒体で書かれており、また、なによりも『皇明詔令』、『国朝典章』（中国国家図書館蔵明鈔本）、『誠意伯文集』巻一「誠意伯次子閣門使劉仲璟遇恩録」などに収録される国内、いわゆる中華向けの大明皇帝の白話聖旨は、いずれもふつうの口語で書かれているからである。明朝廷は、大元ウルスの聖旨が口語の語彙を以て直訳されるの

(28) そのご船田善之は、2003 年 10 月 3 日雲南で開催された中国蒙古族歴史と文化国際学術研討会において、一転して、カルビニが描写した第三代モンゴル皇帝グユクのインノケンティウス四世への返書の翻訳方法から、モンゴル朝廷が統治の便宜のために直訳体を創造したことを論じた[船田 2003]。ただし、それと同じ主張は、すでにインターネット上で公開中の杉山 2003 において、口頭報告の要旨ではあるものの、より明快・具体的な形で示されており、また、世界規模で展開・継承されていくモンゴル命令文、各言語の直訳体現象についても概説されている。論文自体の公開を鶴首して俟ちたい。

(29) 『吏文』の現存テキストはいずれも巻一を欠く。崔世珍『吏文輯覽』の凡例によれば、“旧抄吏文初卷、宣諭、聖旨、皆漢語、於習吏文無関、故不著輯覽、欲習者、宜考諺解、漢語諸書”とある。首巻に収められた洪武期の宣諭、聖旨には雅文漢文のみならず、直訳体が多く含まれていた可能性もある。

を真似して、朱元璋のじっさいの発言そのままに口語で表した。漢語を母語とする人々に発令するのに、わざわざ直訳体を用いる必要は、ない。

たとえば、おなじ山東曲阜孔子廟に宛てて出された大元ウルスの大徳四年発給の文書の一部と洪武元年の文書を比べてみよう。なお、ここにとりあげる二通の文書はいずれも現地に碑文の形でこっそり、後者については、『水東日記』巻一九「孔氏父子奉上諭記」にも多少異同はあるものの移録がある。

①『孔顔孟三氏志』巻二 41b「成宗大徳四年孔廟石刻」

照得；近准蒙古文字訳該；中書省官人每根底，阿魯渾撒里，^{ノヤン}李蘭奚言語；「『在先孔子的後嗣，襲封衍聖公名字与了有来。如今這孔子的五十三代根脚他的孔治在前密州做官，孔夫子的廟祭祀管着有来』麼道，翰林院裏学士『他根底，在前襲封衍聖公体例裏，做襲封呵，怎生？』説有」麼道，奏呵，「那般者」聖旨了也。欽此。

照らし得たるに、近ごろ^う准けたる蒙古文字の訳の該に〔中書省の^{ノヤン}官人每根底，^{アル}阿魯渾撒里^ン，^{サリ}李蘭奚の言語に「『在先，孔子的後嗣は，襲封する衍聖公の名字^{アル}与え了^ンので有来。如今この^{ブル}孔子の^キ五十三代の根脚^ノ←^{カレ}他的^ノの孔治は，在前，密州に官を^ナ做し，孔夫子的廟の祭祀を^テ管し^{アッタ}着いたので有来』麼道，翰林院の裏^{ウチ}の^{カレ}学士が『他根底，在前の衍聖公を襲封する体例の裏に，襲封を^ナ做した呵，^{イカ}い^ガが^デしよう^カか^トいう^ノのである^トい^{ッテ}^{トコロ}怎生？』説有」麼道，^{ソノ}奏した呵，「那般者」と^{ソノ}聖旨が^ク了^タ也〕此を欽しめ。

②『孔顔孟三氏志』巻二 45a

洪武元年十一月十四日臣孔克堅謹身殿内，上对百官奉聖旨；「老秀才，近前来，你多少年幾也？」。对曰；「五十三歳」。上曰；「我看你是有福快活的人，不委付你勾当，你常々写書与你的孩兒。我看資質也温厚，是成家的人。你祖宗留下三綱五常垂憲万世的好法度。你家裏不讀書是不守你祖宗法度，如何中？你老也常写書教訓着。休怠惰了。於我朝代裏，你家裏再出一箇好人呵不好？」。二十日於謹身殿西頭廊房下奏上位；「曲阜進表的廻去。臣将主上十四日戒諭の聖旨，備細写将去了」。上喜曰；「道与他少喫酒，多讀書」。欽此。

洪武元年十一月十四日、臣孔克堅は謹身殿の内にて、上様が百官に対して
いる中で、「老秀才、近うまいれ。そちは何歳じゃ」との聖旨を承った。
「五十三歳でございます」と申し上げると、上様は「見たところ、そなたは
福のある、しあわせな者じゃの。そちには公務を申し付けぬゆえ、つねに
書き物をして、そちの子供に与えてやれ。見たところ、資質も温厚で、一
家を興す者。そちの祖先が遺した三綱五常は、万世に手本を垂れるよき法
度じゃ。そちの家で読書をせぬは、そちの祖先の法度を守らぬこと、どう
してよからうか。そちは年老いていてもつねに書籍を書き写して、教え導
け。怠るでないぞ。我が大明王朝の代にそちの家から再び優れた人を出し
たら、よきことではないか」とおっしゃった。二十日、謹身殿の西の廊房
にて、上様に上奏して「曲阜の、表を進呈しました者(＝孔克堅)が、帰
ります。臣は上様が十四日に訓戒教諭された聖旨をつぶさに書き写して
もっていきました」と申し上げると、上様は喜ばれて「かれに酒は少なく、
読書は多く、と申してやれ」とおっしゃられた。此れを欽しめ。

前者は、パスバ字モンゴル語(中書平章アルグンサリ、ブラルキと成宗テム
ルの会話)の案件を中書省礼部が翻訳、引用したものであることが、前後の文
脈からわかっている。儒教の総本山、曲阜に宛てた文書に、雅文でもなく、ふ
つうの口語でもなく、敢えて直訳体を用いる。後者は、後至元六年に五十五代
衍聖公を襲封した孔克堅自身の記録ということになっている。孔克堅は、人生
のほとんど全てを、モンゴル政府の太常礼儀院、御史台、肅政廉訪司、集賢院
など文化機関における高級官僚として過ごし、平章ダシュ＝テムルの知遇も受
けていた[『孔顔孟三氏志』巻二 20a, 巻三 94b 宋濂「故国子祭酒孔公墓誌銘」]。
孔克堅こそ生粋の華北漢語の話し手であったはずであるが、朱元璋との問答に
直訳体の特徴はまったく現れていない。

また、洪武二年(1369)に発令され、大都、河北などに碑文として残る朱元璋
の聖旨を記した「国子監学制」についても同じことがいえる[北図 1990, pp. 3, 4,

11, 13, 15]. 旧本『老乞大』の言語が、じっさいに義州から大都、直沽（現在の天津）、山東にかけての一带で話された「漢児言語」であるならば、なぜ洪武帝は、山東や大都（北平）にも、高麗宛てと同様の文体の詔勅を送らなかったのか。周知のとおり、『老乞大』は、大都、山東へ馬を売りにいく高麗王朝公認の商人一行と遼陽の漢人商人の道中記という設定になっている。商人、旅籠などのレベルにまで浸透していた口語であれば、モンゴルが北上してからも用いられたはずである。にもかかわらず、洪武年間の初めから急速にこの言語は文献資料から姿を消していく。それは、いったいなぜなのか。旧本『老乞大』をはじめ、直訳体があくまで目で読むモンゴル語からの「翻訳」言語であり、もともと実用の口語でなかったからではないのか。

『直説通略』、『浙西水利議答録』⁽³⁰⁾といった大元時代の編纂物の明刊本、明抄本、『永楽大典』所収の一連の政書に付された句読点の夥しい切り間違いは、成化年間以降の文人がモンゴル語の直訳体をちっとも読めなかったことを露骨に示している。金末からモンゴル初期の山東、山西で急速に勢力を広げた全真教の道士馬丹陽のことば、雑劇のせりふの部分から既述の「誠意伯次子閣門使劉仲璟遇恩録」や曲阜の碑文等に見える朱元璋の口語への移行に断絶はない。直訳体のみが異質な存在なのである。

「漢児言語を話す人々が皆モンゴルとともに華北から逃げていなくなった」などの、言語事象に無理やり虚構の歴史を添わせるたぐいの説明は、もとより論外である。モンゴル朝廷と命運をともにしたのであれば、「漢児言語」を話したのは、モンゴル朝廷内の人々のみということになる。実際には、華北にそのまま留まったモンゴル貴族、非漢民族も多かった。明初の朝廷自体、その実録中において告白するように、モンゴルの旧スタッフとノウハウなしには、やっていけなかった[『明太祖実録』卷三八[二年正月己未]、卷四一[四月乙亥]、卷五一[洪武三年四月甲子]]。それに、「漢児言語が非漢民族と漢族の共通の言語である」と定義するならば、果たしてその言語の範囲を華北

(30) この書の詳細については、別稿にて述べる。

に限ることができるのか。⁽³¹⁾ 混一以後、呉語等を話す江南の人々と非漢民族は呉語で話したというのか。『元典章』や『通制条格』に収録される福建や江西の案件の直訳体と華北の案件の直訳体がまったく同じなのは、どう説明するのか。

ひるがえって、同じ洪武期、高麗宛ての聖旨と同様の文体で書かれた書簡といえ、宋濂がものした一文「渤泥国入貢記」(台湾国家図書館蔵明錫山姚咨手鈔本)の末尾に附された洪武四年五月のブルネイの国王ムハンマド＝シャーの表の訳文がまずあげられるだろう。

渤泥国王臣馬合謨沙為這幾年天下不寧靜的上頭、俺在番邦裡住地呵、沒主的一般。今有皇帝、今有使臣來開讀了皇帝的詔書、知道皇帝登了宝位、与天下做主、俺心裡好生歡喜。本国地面是閩婆管下的小去处……

ブルネイの国王、臣 馬合謨沙^{ムハンマド＝シャー}は、この幾年天下が寧靜でなかつたため、俺は番邦の裡に在って住地いた呵、主沒きの一般。今皇帝有り、今使臣の來たる有りて、皇帝の詔書を開讀了^て、皇帝が宝位に登つた^て、天下の与に主と做るを知道、俺は心の裡に好生歡喜しています。本国の地面は閩婆の管下の小さな去处です……

“～的上頭”，“～的一般”等はもとより、あとの箇所“託着皇帝詔書來的福蔭”とあるのも、あきらかにモンゴル時代の言いまわしである。⁽³²⁾ 宋濂によれば、この表および皇太子の牋文を献じるために、ブルネイから明へ使者として派遣されたのは、ムスリムのイスマール以下四名で、泉州から上陸、八月十五日に南京に入り、翌日会同館で接待を受けている。“其の表は金刻の番書を用い、彷彿たること回鶻書の如く、其の文は鄙陋にして観るに足らず。皇太子の牋は銀を用い、牋文は表と相類す”という。ウイグル文字に似ていること、ムスリムの交易圏内であることなどからすれば、表および牋の原文は、アラビア文

(31) 混一以後、江南にも急速に“北音(中原雅音)”が流入する(『南村輟耕録』卷五「鄧中齋」, 卷二〇「狷潔」, 劉辰翁「須溪集」卷六「北韻序」)。なお中原雅音とは、孔齊によれば、大元時代の汴、洛、中山等の地域における音韻を指す(『至正直記』卷一「中原雅音」)。

(32) 『黒韃事略』に“其常談必曰；託着皇帝長生天底氣力，皇帝底福蔭”とある。

字で書かれたペルシア語の可能性がたかい(ただし、そのペルシア語が本来のペルシア語文法に即していたかどうかはわからない。モンゴル語直訳体ペルシア文であった可能性もある。後述)。翻訳は、チャンパの朝貢の例等からしても[『明太祖実録』卷六七[洪武四年七月]]、明朝廷でなされたものとするのが無難だろう。ただ“其の文は鄙陋にして観るに足らず”とあり、すでにイスマーイール等ブルネイ側によって翻訳、副本として添えられていた可能性も充分にある。とすれば、モンゴル時代、ブルネイ朝廷にも直訳のマニュアルが行き渡っていたことになる。そもそも、“東は日本・高麗、南は交趾・占城・閩婆、西は吐蕃、北は蒙古諸部落の使者が道に踵を接す”と豪語する明朝廷の外交範囲は、じっさいには、大元ウルス時代の交易地の一部分から一步も出ていなかった。また、逆にそれだからこそ、明朝廷は、実態はともかく大元ウルスを越える象徴として、おもてむき“歴代未だ嘗て朝貢せず、故に史籍に載らざる”ブルネイや琉球からものしい“朝貢”の形式を取らせることにやっきとなったのであった。

同様に、直訳体の特徴をもつ資料としてよく知られているものに、『御製文集』卷一(台湾国家図書館蔵明初内府刊本)、『賜諸蕃詔敕』(旧北平図書館蔵米国会図書館マイクロフィルム明初内府刻本)に収められる洪武十年六月二十四日発令の「諭西番、罕東、畢里等詔」がある。

奉天承運の皇帝、教説与西番地面裏應有的土官每。知道者。俺将一切強歹的人都拏了。俺大位子裏坐地有。為這般上頭、諸処裏人、都来我行拝見了。俺与了賞賜名分、教他依旧本地面裏、快活去了。似這般呵、已自十年了也。止有西番、罕東、畢里、巴一撒、他每這火人、為甚麼不将差發来。又不与俺馬匹牛羊……

天を奉じ運を承る^の的皇帝が、西番^{うち}の地面^{あら}裏^{ゆる}の應^{たち}有^い的土官^し每に説^しい^れと^{われ}え^ら教^{きよう}め^{あくな}る。知^し道^れ者。俺^{われ}は一切^{きよう}の強^も歹^{みな}の^{つか}人^{また}を^{われ}将^(ら)て都^{たかみくら}拏^{うち}了。俺^{われ}が^{うち}大^{すわ}位^つ子^わの裏^らに坐^{すわ}地^わ有^るの^たで^{われ}有^らる。為^あ這^{この}般^{よう}上^{ある}頭^{ため}、諸^{うち}処^{みな}裏^{われ}の^{ところ}人^たが^{われ}都^た来^{われ}て^ら我^{われ}の^ら行^いに^く拝^く見^く了。俺^{われ}は^に賞^こ賜^こ、名^ち分^ちを^{くら}与^いえ^い了、他^いを^い教^いて^い旧^い本^いの^い地^い面^い裏^い依^いつ^いて、快^いく^い活^いし^いに^い去^いか^いせ^い了。似^い這^い般^いな^いつ^いた^い呵、已^い自^い十^い年^いが^い了^い也。止^いだ^い西^い番^い、罕^い東^い、畢^い里^い、巴^い一^い撒^いが

有り、他每^{かれら}這^この火人^なは、為^ぜ甚麼差^な発^ぜを將^なって来^なない。又、俺^{われら}に馬匹^{ばひ}、牛、羊^{やう}を与^よえない・・・

“～有”，“為這般上頭”などはもとより，“私のところに”の意を表す“我行(háng)”なども見える。詔の後半部には、次のような一節もある。

俺聽得説，「你每^{われら}釈迦^い仏根^お前^{まへ}，和尚^お每^{まへ}根^に前^に，好生^{ずいぶん}多^お与^よ布^ふ施^し」麼道^な。那^な的^{てき}是^し充^{ちゅう}分^{ぶん}好^{こう}勾^{こう}当^{とう}，你^な每^{めい}做^し了^し者^{しや}。那^な的^{てき}便^{べん}是^し修^{しゅう}那^な再^{ざい}生^{しやう}底^{てい}福^{ふく}有^あ・・・

俺^{われら}は説^いうのを聴^きき得^えてい^る「你^お每^{まへ}は釈^{しや}迦^か仏^{ぶつ}根^{こん}前^{ぜん}，和^わ尚^{しやう}每^{めい}根^{こん}前^{ぜん}，好^{こう}生^{しやう}多^たく布^ふ施^しを与^よえてい^る」麼道^な。那^な的^{てき}は充^{ちゅう}分^{ぶん}に好^{こう}い^ふ勾^{こう}当^{とう}で，你^お每^{めい}は做^しして^し了^し者^{しや}。那^な的^{てき}は便^{べん}ち^ち那^なの再^{ざい}生^{しやう}を修^{しゅう}め^る底^{てい}福^{ふく}で有^ある・・・

ここにも，“根前”，“麼道”，“～有”など直訳体の特徴が現れている。西番，罕東，畢里，巴一撒は，チンギス＝カンの第二子チャガタイ系の「チュベイ・ウルス」がおさえていた地方である[杉山 1982, 杉山 1983, 杉山 2004, pp. 310, 323-328, 332-333]。したがって，じっさいにはモンゴル語で書かれた文書が正文であり，その翻訳である漢語のほうはあくまで附録として送られた，とみるのが普通だろう。『御製文集』，『明実録』等に収載される諸外国，いわゆる非漢民族への詔がいずれも雅文漢文で書かれているのに，「西番⁽³³⁾，罕東，畢里等を諭す詔」のみが直訳体なのは，この詔については，雅文漢文のそれがもともと作成されなかったか，もしくは文集に収録するさいに雅文版が紛失していたためだろう。おそらく口頭の聖旨から直接モンゴル語に訳され(ふつうは，この段階で翰林院に委託して雅文聖旨も作成される)，文書庫に，モンゴル語版とその傍文直訳⁽³⁴⁾の控えが残っていたのではないか。『賜諸蕃詔敕』，『御製文集』巻六所収の

(33) 実録では，すべて雅文漢文に書き改められた。たとえば，『三朝聖諭録』上に“永樂二年，一日，進呈勅辺将藁，上曰；「武臣辺将不諳文理，只用直言俗説使之通曉，庶不誤事。他日編入実録，却用文」”という。

(34) たとえば，『大明会典』卷一七四「事例」に“凡内閣所掌制勅，詔旨，誥命，冊表，宝文，玉牒，講章，碑額及題奏，揭帖等項，一應機密文書，各王府勅符，底簿，制勅房書辦。文官誥勅及番訳勅書并四夷來文，揭帖，兵部紀功，勘合底簿等項，誥勅房書辦。各用中書舍人等官，於本院或各該衙門帶俸，遇有陞遷，仍旧供職。其有堪別用者，亦從吏部推舉”とある。

「諭元丞相驢兒勅」には、一部口語がのこっており、収録にあたって平易な雅文漢文の体裁にととのえた可能性さえある。

なお、洪武八年正月に、烏斯蔵のカルマバに宛てた御宝聖旨にも、

皇帝聖旨；中書省官我根前題奏；西安行都衛文書裏呈來說；烏斯蔵哈尔麻刺麻卒尔普寺在那里住坐修行。我想修行是好的勾當，教他穩便在那里住坐。諸色人等休教搔擾。說与那地面裏官人每。知道者。〔蔵学档案 1994, p. 85〕

皇帝の聖旨に；中書省の官が我の根前^{もと}に題奏するに；西安行都衛の文書の裏^{うち}に呈して来たりて説^いうに；烏斯蔵の哈尔麻刺麻は卒尔普寺^{ウツァン カルマ=ラマ ツルプ}の那里^{そこ}に在りて住坐し修行す。我の想^{われ}うに修行は是れ好^のき^{こと}的勾當にて，他^{かれ}を教^して穩便に那里^{そこ}に在りて住坐せしめよ。諸色^その人等^こは搔擾^せ教^しめるな。那^かの地面^{うち}の裏^{うち}の官人^{たち}每^いに説^しれ^れい^れ与^れえる。知道者。

とある。

少なくとも、明初期、中華向けの詔はふつうの口語、高麗・チベット・河西のモンゴル諸王家・ブルネイ等との外交文書は直訳体と明確に使い分けられていることは否定できない事実である。この理由を、いったいどう説明するのか。

『故宮書画録』巻七に紹介される「明太祖御筆」上下二冊（架蔵番号：原九二）は、国内外に宛てた七十六篇の詔，勅諭の控え（御筆とするのは正確ではない）を万暦年間に閣臣の申時行が故牘から探し出して表装したもので、明初の軍事，外交資料としてきわめて重要だが，同時にまさにこの言語の使い分けの事実を具現する資料ともいえるだろう〔故宮 1956, pp. 66-91〕。すなわち，諸藩に分封した自身の王子達や漢族の部下に宛てたものは，普通の口語もしくは吏牘体，雅文漢文で書かれている。いっぽう，もと大元ウルスの平章政事で明朝廷に雲南建昌衛の指揮使に任じられたオルグ＝テムル，チュベイ系に属する沙州衛のモンゴル王アルカシリ（もしくはエルケシリ）等に宛てたものには，“根前”，命令形の“～著”，推量形の“～也者”，句末の“有”，“麼道”等が見られ，

あきらかに上述の国書と同じ特徴をもつ。⁽³⁵⁾ 下冊 No. 5 のモンゴルのネケレイ等に宛てた論旨には、次のようにある。

大明皇帝諭丞相捏怯来。洪武二十一年十一月^{原欠数字}日。知院火兒灰^{原欠数字}。尚書某人到京。將到丞相文書裏面意思。口說的緣故。都知道了。説「丞相要口温地面住座。這是丞相与多官人。衆百姓每心愛処。便是好有。心裏喜住処不座地呵。多人不喜歡」麼道。揀長便処。安多人心呵好。且如今遍丞相与多人来的緣故。我知道了。「也速迭兒這人祖宗以来。宗族裏面目使的人」麼道。今遍与馬刺哈咱。咬住。衆人「廢了你的可干」麼道。若是丞相隨著也速迭兒行呵。不是丞相同廢君呵。也是也者。如今丞相不為臣下之臣。逕来我行来呵。「一是知天命。二是要与你的可干報讐」麼道。揀麼那箇尋思的意思。都不如丞相最高。這箇好名而遠伝將去。万古有名有(里)[理]。如今口温立口温衛。丞相做指揮使。多人名分。丞相写将来。我定奪。行同印信一同去。我的意思這般定奪。未知丞相与多人心裏如何。若不合意呵。再説将来。故勅。

大明皇帝が丞相捏怯来^{ネケレイ}に諭す。洪武二十一年十一月^{原欠数字}日。知院の火兒灰^{コル}。尚書^{タイ}の某人京に到り。將て到る丞相の文書の裏面の意思を。口で説いた^{たので}。みなわかった^{みなわかった}。説うには「丞相は口温の地面に住座するを^{もと}要めている。

(35) 上冊 No. 32: 諭建昌衛指揮使(馬)[月]魯帖木兒。如今賈哈羅我見了説「老羅刺是(馬)[月]魯帖木兒母舅」。這般說的明白。若漢人論。十分骨肉親。為甚麼兩下裏疑? 今命舍人某。与同来某。送賈哈刺到建昌知任。知任了。便教去他父老羅刺根前。回朝觀的事有。賈哈刺兩個叔叔羅牙・羅刺。就回北興地面。原住処住^{原欠数字}。太平時年。休記讐。親的每親厚着過好生好。自家不和。別生出事来。不止不快活。連性命也不得。我的言語説將去。老羅刺好生痛外生著。(馬)[月]魯帖木兒好生孝順母舅著。老羅刺看的羅牙・羅刺兩兄弟好著。這般呵。地面人情十分好。故茲勅諭。

下冊 No. 12: 礼部為進貢事。洪武十七年閏十月^{原欠数字}日於華蓋殿早朝。本部尚書^{原欠数字}奉旨; 教將沙州王及抹脫等来進馬的使臣某。早發回去。那里此時多官人每必是望信。早到那里。衆官人行說的知道。「王与衆官人每好心。俺這里知了」麼道。「教王与多人到来年草青時節。往南甘肅地面沙州迤南地面里。可屯種処。可養頭正処。從便快活住著」麼道。若心裏十分喜歡呵。那時重將賞賜与也者。你礼部即行文書去(この文書は、上冊 No. 32 と異なり、一見皇帝から礼部宛に出されたように見えるが、礼部が沙州王等に間接的に聖旨を伝える外交文書である)。

これは丞相と多くの^{ノヤン}官人、衆くの^{じんみんたち}百姓毎の心に愛する^{すなわち}処にて、便是好いの
で有る。心の裏に喜ぶ^{うち}住処に座地しなかつた呵、多くの人は喜^ら歡しないだ
ろう」^{という}麼道。長便の^{ところ}処を^{えら}揀び、多くの人の心を安んじた呵好い。且つ今遍丞
相と多くの人が^た来的縁故の如きを、我は^{しった}知^{イエスデル}了。この人は祖宗以
来、宗族の裏に面目を^の使う^と的人」麼道、今遍馬刺^{いい}哈咱、咬住、衆人^と与「^{おまえの}你的
可干を^た廢^た了」麼道。若是丞相が也速迭兒に随^て著行^らった呵、丞相が^{とも}同に君
を廢^{ても}したのでなく呵、也^{またそう}是^だ也者。如今丞相は^い臣下の臣と^た為らず、^{ただ}選^たちに来
りて^{ところ}我の行^{ところ}に^は来^はた呵、「一^は是天命を知り、二^は是你的^{はおまえの}可干^{カアン}の^{ため}与に報^も讐^とを要め
る」麼道。那箇^{という}尋思^{どちらの}し^た的意思を^も揀^{みな}んだのであつて麼、都丞相の最も高きに如
かず。這箇^{この}好^いき名^いは而して遠きに伝わり^い將^いて去^いき、万^い古^いに名^い有^いり理^い有^いり。
如今^{いま}口温^いに口温^い衛^いを立て、丞相は指揮使^いを^い做^いし、多くの人の名分^いは、丞相
が^か写^かきて^も將^もて来^もい。我が定奪^いし、行^いするに印信^いと一同^いに去^いかしむ。我的意
思^{このよう}では^と般^とに定奪^とす。未だ^い知^いらず、丞相と多くの人の心の裏^{うち}は如何。若し
意^いに合^いわなかつた呵、^も再^もび^い説^いい^い將^いて来^いい。故に^い勅^いす。

ときを遡ること半年前、大元ウルス皇帝トグス＝テムルは藍玉率いる大明軍
の急襲に遭い、ブユルノールからカラコルム目指して逃走中、トーラ河付近で
イエスデルとオイラト部の軍によって殺害された。イエスデルは、嘗てクビラ
イとカアンの座を争ったアリク＝ブケの後裔である。トグス＝テムルに付き
従っていたネケレイ等は、命からがら脱出、やむをえず明朝廷への投降を決
断、コルクイ、イラカ等を派遣、書簡と馬を献上したのである[『明太祖実録』
卷一九四[洪武二十一年冬十月丙午]]。この朱元璋の勅諭は、ネケレイ等からも
たらされた文書に答えたものにほかならならない(ネケレイは、じっさいには知
院であり、丞相はシレムン、コルクイは右丞であつた。抄写の段階での脱落、
誤解、あるいは、のちのシレムンの反抗が影響している可能性もある)この諭旨
をうけて、さらに大元国公老撒が翌年の正月に入朝し、ネケレイ等の返事を伝
えた[『明太祖実録』卷一九五[洪武二十二年正月戊戌]]。

そしていわゆる甲種本『華夷訳語』には、その洪武二十一年冬にネケレイから送られたモンゴル語の書簡と対訳が収録されている。⁽³⁶⁾であれば、ネケレイに宛てた勅諭も同じモンゴル語で書かれたと見てまちがいない。じじつ、そのご口温、全寧、応昌一帯に所領を認められたネケレイに対して下された文書もモンゴル語で書かれており、同じ『華夷訳語』に「勅礼部行移応昌衛」として収録されている。『皇明開国功臣録』（台湾国家図書館蔵正徳刊本）卷三二「汪五十八」には、モンゴルの有力王族ナガチュとともに明朝に投降したアス族のタビンナイマンに、洪武帝が雅文漢文の制詰とともに“其の国書に訳して之を賜わった”という記事も見られる。

同様に、『御製文集』、『賜諸蕃詔敕』、『明実録』等にみえるアジャシリやナガチュ等モンゴル諸王、貴族、チベット仏教僧リンチェンツァンボ等に宛てた詔が、建前として雅文漢文のそれも送付されはするが、じっさいにはモンゴル語で発令されたことも、この『華夷訳語』に収められている「詔阿札失里」、「勅僧亦鄰真臧卜」、「勅礼部行移安答納哈出」などによってあきらかとなる。

外交言語に「漢児言語」が用いられたなど、幻想にすぎない。じじつ朱元璋みずからも、「チベットは漢人言語がわからぬから、チベットの官人を派遣する」と述べている。⁽³⁷⁾モンゴル諸王はもとより、大元ウルスの駙馬国であった高麗、歴代カアンが精神のよりどころとして深く帰依したチベット仏教のチベット、この両国首脳部には、公用語としてのモンゴル語の使用はごく当たり前のことであった。上にあげてきた高麗、チベット、モンゴル宛ての詔、勅諭、ブルネイの表文は、本来モンゴル語あるいはペルシア語で書かれていた。我々がここにち見ているものはその訳文である。だからこそ、これら外国向けのものののみ、

(36) Haenisch 1952, pp. 15-16, 25, Mostaert 1977, pp. 11-12, pp. 28-29, 烏・満達夫 1998, pp. 291-311, 栗林 2003b, pp. 102-105.

(37) 『故宮書画録』巻七「明太祖御筆」下冊 No. 13: 大明皇帝聖旨; 教江夏侯・安慶侯, 將茶去西番地面裏買馬。為西番不省得漢人言語, 再教兩箇西番火者官人去, 說与他多西番每知道。各族裏有的馬, 売与我每些箇, 買馬的茶, 差去的人, 照那里例兒, 与肯壳馬的族分, 陝西都司・布政司辺上官人每, 看的好著。不要攪擾那箇族分。不壳馬的說将来。別做箇道理待他。

ふつうの口語とことなる直訳体なのであった。朱元璋がじっさいにこの言語を喋っていたわけでは決していない。

では、明朝の外交文書の翻訳は、なぜこの前代に由来する文体を取って採用したのか。

(2) 四夷館の翻訳

洪武十五年(1382)春正月六日、朱元璋は、モンゴルの遺臣でいまはそれぞれ、翰林院侍講、編修の任にある火原潔、マシャイフ等⁽³⁸⁾に、モンゴル語の翻訳法のテキストとして、『華夷訳語』の編纂を命じる。火原潔は中華育ち、少なくともモンゴル語、漢語のバイリンガルで、四書五経にも通じていたという。天文、地理、人事、物類、服食、器用などあらゆる方面の単語を収載し、例文として、じっさいにモンゴル語で発令した詔勅、あるいはモンゴル語で受け取った表文を付した。それらのモンゴル語は、ウイグル文字でもパスバ文字でもなく、漢字による発音表記(やはりモンゴル時代のノウハウに従ったもの[李 1991, p. 201, 図版参覧])により、例文には、逐語直訳の傍訳と句ごとの総訳が施された。ただし総訳については、きわめて平易な雅文漢文→文白混交文(「勅札部行移応昌衛」に一部、雅文漢文に直し忘れた箇所が見られる)→傍訳があるのでふつうの口語に近づけた直訳体(「勅札部行移安答納哈出」)と、例文を読み進めるにつれ変化していき、「撒蛮答失里等書」以降には付せられていない。学習者自身に翻訳文作成の練習をさせるためだろう。

「勅札部行移安答納哈出」の総訳のうち、前節にて紹介したネケレイ等への論旨と密接に関わる部分を参考までにあげておく(ちなみに、この文面は、洪武二十二年十一月のチュベイ家のクナシリを招諭したそれとほぼ同じ内容である[『明太祖実録』卷一九八])。

(38) 『明太祖実録』卷一四一「洪武十五年正月」“丙戌、命翰林院侍講火原潔等、編類華夷訳語。上以前元素無文字、發号施令、但借高昌之書、製為蒙古字、以通天下之言。至是乃命火原潔与編修馬沙亦黑等、以華言訳其語。凡天文、地理、人事、物類、服食、器用、靡不具載。復取元秘史参考、紐切其字、以諧其声音。既成、詔刊行之。自是使臣往復朔漠、皆能通達其情”、Haenisch 1952, Haenisch 1957, Mostaert & Rachewiltz 1977, 1995, 烏・満達夫 1998, 栗林 2003b.

「自脱歎帖木兒皇帝，他做皇帝時，於多百姓上好生不愛恤」麼道。因此上天
下人乱了，積漸整治不得，豪傑每多，無那一定的時節，我每在閑中坐地，
見多百姓每不能勾寧息，因此上鄉中親戚并隣里衆伴当每商議(者)[着]，收
拾了些人馬，將乱雄每四五年間都平定了。達達軍馬每歸附的歸附了。草地
裏去了的多。洪武二十年，二十一年，兩次遣兵，直到達達田地裏，將有的
達達每帶回來撫綏了。那做皇帝的脫忽思帖木兒，領着万已上人，走往也速
迭兒那裏去了，被也速迭兒連他孩兒都擒住。使臣來說呵，「都廢了」麼道。
其余人馬，第四知院捏怯來，国公老撒，丞相失列門，尽数領來歸附我每，
安札屯種順水草牧放頭口。

ちなみに、『華夷訳語』に収められる詔，来文が編纂開始より七年も経過した
洪武二十二年(1389)のものまで含み，同年十月十五日付けの劉三吾の序が附さ
れるのは，いうまでもなくトグス＝テムルとその後嗣の死によってクビライの
聖なる血脈が途絶えたこと，モンゴルの中でも大勢力であるナガチュ，トグス
＝テムル傘下のネケレイ等の投降を示す，明朝廷にとって記念すべき文書を収
録しなかったからである。ここにいたって，モンゴルの脅威に対して明朝廷は
一息つくことができたのである。これらの文書を，翻訳官養成の場で，モンゴ
ルをはじめとするいわゆる非漢民族と漢族を問わず繰り返し学ばせていくこと
は，すなわち，大元ウルスの正統な後継者としての大明朝廷，その偉大さをア
ピール，刷り込むことを意味した。明朝廷は，あきらかにイエスデル，オイラ
ト部のモンゴルを意識していた。語学書として注目されるためか，じゅうらい
指摘されていないが，『華夷訳語』の編纂はきわめて政治的な所産でもあった。

『華夷訳語』の例文以外に，大都に蔵されていたウイグル文字モンゴル語によ
る黄金の氏族チンギス＝カン家の秘密の史冊——いわゆる『元朝秘史』も同様
の細工を施され，長編の読本教材として，学生に供された。

周憲王朱有燾の戯曲「美姻縁風月桃源景」(『奢摩他室曲叢』第二集所収)は，
途中モンゴル人が酒を飲み，モンゴル語で話し，モンゴルの歌をうたう場面が
挿入されることで有名だが，

[孤云]這達子，你說番語，我不省得。你學漢兒說與我聽。[淨云]官人馬不見有，下着大雪，那裏去尋那馬有。

という。孤(官僚役：御史台の役人)に「モンゴル語はわからぬから、漢人の真似をしてしゃべって見ろ」といわれて、淨(三枚目：モンゴル人)が“～有”を連発するのは、この芝居をつくった周憲王はもとより、観客として想定されている宮廷内の皇帝、官僚たちに、『華夷訳語』、『元朝秘史』をはじめとするこのモンゴル語の直訳体がよく知られていたからである(朱有燾と同じく雑劇作家としても名をのこした寧献王朱権が『元朝秘史』を読んでいたことは、たとえばかれの著『天運紹統』によって証明できる)。淨が文書翻訳の文体を当意即妙に口語として使ってみせたところに、この場面のオチがある。これが、かりに明太祖も話した共通語の「漢兒言語」であるならば、笑いはとれなかっただろう。なお、この例は、もとにモンゴル語原文があるわけではないので、擬直訳体といえる。

洪武二十三年の九月には、大寧等の衛に儒学を置いて武官の子弟を教育するいっぽうで、モンゴルの文字が読める者を送り込み、モンゴル語の文書を学習させ、翻訳、通事官の育成にもつとめた[『明太祖実録』卷二〇四]。こうした場でも、さっそく『華夷訳語』、『元朝秘史』が教材として使われた可能性がある。

また、『華夷訳語』の編纂と同じ洪武十五年秋九月、朱元璋は、司天監の海達児(ハイダル)、阿答兀丁(アッター＝アッディーン)、回回大師のマシャイフ＝ムハンマド等モンゴルの旧臣たち⁽³⁹⁾に、やはり大元ウルス朝廷の書籍の中から、イスラムの天文書を翻訳させ、翌十六年に刊行した。こんにち『明訳天

(39) 『明太祖実録』卷三五[洪武元年九月]“甲午，詔徵元太史院使張佑，張沂，司農卿兼太史院使成隸，太史同知郭讓，朱茂，司天少監王可大，石沢，李義，太監趙恂，太史院監侯劉孝忠，靈台郎張容，回回司天太監黑的兒，阿都剌，司天監丞迭里月實一十四人至京”，『明太祖実録』卷四一[洪武二年夏四月]“庚午，徵故元回回司天台官鄭阿里等十一人至京師”，『明太祖実録』卷一五三[洪武十六年三月]“己巳，召回回珀珀至京，賜以衣巾靴襪，珀珀明天文之學，寓居寧波府鄞縣，有以其名聞者，故召之”。

文書』とよばれている書物である。⁽⁴⁰⁾ おなじマシャイフが翻訳にからんでいるにもかかわらず、直訳ではない。それは、巻頭の序文で呉伯宗がのべるように、原文がモンゴル語ではなくペルシア語であったこと、語学教材ではなく、イスラム暦を実用に供するため、朱元璋の指示で、マシャイフ＝ムハンマドが口頭で中国語に翻訳するのを、片端から翰林の李翀、呉伯宗等に平易簡明な漢文で纏めなおさせたからである。やはり同時期の『回回薬方』（中国国家図書館蔵明抄本〔宋2000〕）が直訳体でなく、『三国志平話』をはじめとする大元時代に刊行された一連の平話の文体に近い文白混交文であるのも、同じ理由による。

火原潔やマシャイフ以外にも、たとえば、コニチが洪武九年(1376)三月に翰林院の蒙古編修を授けられ、『明太祖実録』巻一〇五〔洪武九年三月癸未〕、洪武二十一年(1388)に帰順したモンゴル人クトゥダイが、大元ウルスの翰林侍読学士であったように、『明太祖実録』巻一九四、明朝は熱心にモンゴルの旧臣を取り込んだ。モンゴル人の丑驢(漢名は李賢)は、大元ウルス朝廷では工部尚書であったが、洪武二十一年以後は、燕王(のちの永楽帝)のもとで活躍し、“凡そ塞外の表奏、及び朝廷の降す所の詔勅は、みな彼をして訳せしめた”という。⁽⁴¹⁾ 丑驢の仲介で太祖に推薦されたモンゴル人の七十(ダラン)も、大元ウルスの故臣であることから、拔擢され翻訳に従事した。⁽⁴²⁾ 翻訳のノウハウは、これらの人々によって明朝に伝えられたのである。

(40) 『殿閣詞林記』（京都大学文学部蔵明嘉靖刊本）巻八「修撰答禄与権」“答禄与権其先胡人。後居河南永寧，仕元為河南北道僉事，以故官入朝。洪武六年為秦府紀善，改監察御史……中略……先是出為広西僉事，未之任，復召回至。八年三月擢修撰，降典籍，転応奉致……中略……又有馬沙亦黑馬哈麻者，亦西域人也。能通華夷訳語，善測天文，上命為編修，特勅勞之”，『明太祖御製文集』巻八「翰林編修馬沙亦黑馬哈麻勅文」，『明訳天文書』「呉伯宗序」，『天方至聖実録』馬沙亦黑「回回天文書序」，中国国家図書館所蔵の洪武十六年内府刻本「回回暦法」も『天文書』の副本として編纂されたものである。

(41) 『明史』巻一五六「李賢伝」“李賢，初名丑驢，鞏鞏人。元工部尚書。洪武二十一年来帰，通訳書。太祖賜姓名，授燕府紀善。侍燕世子最恭謹。靖難師起，有勞績，累遷都指揮同知。凡塞外表奏及朝廷所降詔勅，皆命賢訳”。

(42) 『明仁宗実録』巻九下“擢七十為行在鴻臚寺右寺丞。七十，鞏鞏人，通蒙古書，都指揮李賢言於太祖皇帝，命教習訳訳。至是吏部尚書蹇義言；七十元之故臣，遂擢用之”。

そして明朝の外交言語も、大元ウルス時代と同様、あいかわらずモンゴル語とペルシア語であった。その象徴として、永楽五年(1407)五月十一日、ミール＝ハーッジー(米里哈只)に、揚州でのイスラム教の布教を認めた勅諭があげられるだろう。この勅諭は、現在、民族文化宮に保管されているが、右に雅文漢文、中央にペルシア語、左にモンゴル語の合璧文書である[泉州1984, pp. 7-8, 図版20]。

この永楽五年には、洪武期の翻訳事業をさらに発展させた形で、翰林院に四夷館が正式に付設され、韃靼、女真、西番、西天、回回、百夷、高昌、緬甸の八館に分かれた。モンゴル人のダランタブン(七十五、のち徐晟)やムスリムのハーディ(哈的)も永楽の初めに、この“外夷文字”の翻訳のために召し出され、いご“凡そ西北二虜及び南夷の事、悉く与り之を聞す”るようになり[『明仁宗実録』卷三下[永楽二十二年十月癸丑]]、最初の学生であるウイグル人の昌英は、しばしばカラコルムやハミのモンゴル諸王のもとへ使者にたち、正統年間には通事および四夷館の教師に任じられている[『明英宗実録』卷二六六[景泰七年五月朔]]。僧録司左覚義としてチベット方面のさまざまな権益を握った西寧衛出身の張ダルマも、最初はチベット仏教僧の朝貢のさいの翻訳、通訳官として永楽帝に見出され、出世の足がかりを得た[『明太祖実録』卷二一〇[永楽十七年三月辛酉]]。

チベットでは、大元ウルス以来の聖旨、詔勅、懿旨、令旨、チベット語の国師の法旨などの現物が、こんにちまで多数保存されている[蔵学档案1994, 西藏1995]。大元時代のカアンの聖旨、皇后、諸王の懿旨、令旨等はパスパ字モンゴル語で書かれていた。それが、四夷館設立以降の明朝廷の詔勅は、現在知られている限りでは、絹地に右から雅文漢文、左からチベット語を合璧で記したものがほとんどで、モンゴル語を付さなくなる。

とはいえ、八館のなかでも依然モンゴル語の教育がとくに奨励されていた。景泰三年(1453)の時点で、明朝が西方宛での外交文書をまだ常にモンゴル語で書いていたことは、トプカプサライ博物館に現存する、景帝がラーリスターン

地方の都，ラールの頭目ヤンリルジに宛てた漢語とモンゴル語合璧の勅諭によって証明される。そのモンゴル語は，漢文の固くて簡潔な用語法を自分のことばで容易く自然に表現できる人物によって原文の意味に忠実に翻訳され，なおかつ擬古的な雰囲気の漂う莊重なことばで書かれていた [Cleaves 1950]。また，東方では，女真館をわざわざ開いたにもかかわらず，とうの女真人が女真文字に堪能ではなく，じっさいには，大明，朝鮮，女真の間ではモンゴル語の文書のやりとりが一般であり [河内 1997, 河内 2000]，この状況は，満文の創製までつづく⁽⁴³⁾。

西域の玄関口，要害の地を統べたハミ王家は，『華夷訳語』の「納門駙馬書」にも記されるごとく，チャガタイ家チュベいの末裔である [杉山 1982, 杉山 1983, 杉山 2004, pp. 242-283, 323-328, 332-333]。洪武末期からのティムール朝との緊迫した折衝の場においての中継はもとより，永楽帝が自身のケシクで養ったトクトを当主として送り込んで以降，諸番の明朝廷への入貢，夷使が齎す特産物は，全ていったんこのハミ王家を介して，上奏文が翻訳，添付されるようになったという⁽⁴⁴⁾。チャガタイ家およびそのスタッフであれば，モンゴル語はもとより，ウイグル語，ペルシア語，トルコ語，チベット語等自在に扱えただろう [『明太祖実録』卷二一六 [洪武二十五年二月癸亥]，卷二四九 [洪武三十年正月丁丑]]。してみると，四夷館では上奏文の翻訳よりも，皇帝の聖旨，勅諭を諸外国語に直す任務に，より重点が置かれていたのかもしれない。

洪武，永楽期をくだってのちのオイラトのエセンと通事の楊銘(哈銘)の交渉を記した『正統臨戎録』や弘治年間のチャガタイ・ウルスのアフマドとハミ王家の争いを記録した『平番始末』のモンゴル諸王の会話，文書の訳にも，句末の

(43) 『太祖高皇帝聖訓』卷三「興文治 己亥二月」“漢人読漢文，凡習漢字与未習漢字者皆知之。蒙古人読蒙古文，雖未習蒙古字者亦皆知之。今我国之語必訳為蒙古語読之，則未習蒙古語不能知也。如何以我国之語製字為難，反以習他国之語為易耶”。

(44) 『哈密事績』(台湾国家図書館，旧李文田藏本)“文皇即哈密地封元遺孽脫脫為忠順王，賜金印，令為西域襟喉，諸番入貢，夷使方物，悉令此国訳文具開”，『馬端肅公三記』下「興復哈密国王記」，『西域行程記』「哈密」も参照。

“有”をはじめとする直訳体の特徴が出現する。これもやはりモンゴル語を伝統的な翻訳法に従って漢字で表しただけのことなのであった。とくに後者は、漢族同志の会話は文言、モンゴル語は直訳体と、明確に使い分ける。モンゴル諸王がじっさいに直訳体の漢語で話していたわけでは、けっしてない。『姚文敏公遺稿』(中国国家図書館蔵弘治刊本)の“番文”から訳出されたハミの上奏文、『晋溪本兵敷奏』のトルファン方面からの文書の訳の引用にもこの文体が使用されている。張居正も、自身に届けられた烏斯藏の僧人鎖南堅錯賢吉祥の番書一紙の訳を引用しているが[[張文忠公全集]「奏疏八・番夷求貢疏」],そこには

知道你的名顯如日月，天下皆知有。你身体甚好，我保佑皇上，昼夜念經有。甘州二堂地方上，我到城中，為地方事。先与朝廷進本，馬匹物件到了。我和闡化王，執事賞賜。乞照以前好例与我。我与皇上和大臣，晝夜念經，祝讚天下太平，是我的好心。压書礼物，四臂觀世音一尊，毘盧二段，金剛結子一方有。閣下分付順義王，早早回家，我就分付他回去。虎年十二月初頭写。

知道^{しって}いる，你的^{あなたの}名^{あき}が顯^{あき}らかなること日月の如く，天下の皆が知っているの^{わたし}で有^{あなた}ることを。你的^{あなた}の身体が甚だ好く，我が皇上を保佑できるよう，昼夜經を念じているので有^{わたし}る。甘州二堂の地方の上に，我は城中に到り，地方の事を為す。先に朝廷の与に^{ため}本^{じょうそうふん}を進め，馬匹の物件を到^{いた}し了^た。我和闡化王は，賞賜を執事した。乞うらくは以前の好例に照らして我に与えんことを。我が皇上和大臣の与に^{ため}，昼夜經を念じ，天下の太平を祝讚するは，是れ我的^の好^よき心。压書の礼物は，四臂の觀世音一尊，毘盧二段，金剛の結子一方で有^{もど}る。閣下が順義王に分付^{もうしつ}けて，早早に家に回らしむれば，我は就^{ただ}ちに他^{かれ}に分付^{もうしつ}けて回^{もど}り去^いかしめん。虎の年十二月の初頭に写^かいた。

とある。おなじ張居正の口語で書かれた經筵講義のテキストと比較すれば，これが「翻訳」言語であること，明らかである。万曆年間にいたっても，この翻訳法がゆるやかに変化しつつも伝わっていたのである。

ひるがえって、『華夷訳語』には、上にとりあげた火原潔等の『華夷訳語』(甲種)のほかに、大きくわけて三種のテキストがあることが知られている[石田 1931, pp. 10-13, 石田 1944, pp. 147-150]. ひとつは、永楽五年の四夷館の開設にともなって編纂、増改訂されつづけたもので、漢語と当該外国語の対訳による単語帳「雑字」、および諸外国からの表、明皇帝の勅諭等の例文集ともいうべき「来文」からなる。甲種本とことなり、「来文」の外国語は、漢字による発音表記ではなく、当該外国語の文字表記によって書かれている(乙種)。もうひとつは、明の会同館が編纂したテキストで、「雑字」のみ、甲種本と同様、もとの外国語では表記されず、単語の発音は漢字によって示されている。抄本のみが伝わる(丙種)。最後のひとつは、乾隆十三年会同四訳館の設立以降に編纂されたもので、やはり「雑字」のみから成る(丁種)。

ところが、乙種『華夷訳語』における各国の「来文」の漢語は、甲種『華夷訳語』の傍訳のそれとは異なり、なめらかな漢語で書かれている。ぎゃくに、諸外国の言語のほうに問題がある。たとえば、乙種『韃靼館訳語』収録の毛隣衛や建州衛、哈密衛、朵顔衛等からの来文は、山崎忠が指摘したように、「漢文は文体をなしているが、蒙古語は、ただ単に語詞を機械的に、漢文の語序に従って、ならべたものに過ぎない。従って、蒙古語とは名ばかりで、文章としては全然成り立たない」[山崎 1955, p. 138]. また、『回回館訳語』のペルシア語の来文は、本田實信によれば、「漢文の文字どおりの逐語直訳であって、ペルシア語としての体を成していない」。「ペルシア文の来文がハミ、トルファン、サマルカンドなどからの表文の原文であったとは到底考えられず、『来文』の作成には『雑字』が参考にされたのであろう」という[本田 1963, p. 532]. 『高昌館訳語』の「来文」においても、まったく同じ現象が見られる。胡振華・黄潤華は、「漢語が先にあって、それをウイグル語で逐字直訳しているため、当時のウイグル口語の状況を反映しておらず、とりわけ、そこに当時のウイグル語の語法の特徴を見いだすことは至難である」といい[胡・黄

1981, pp. 8-9], さらに劉迎勝は「表文の多数は偽造されたものだろう」とまでいう[劉 1996, p. 193]。『西番館訳語』の「来文」では、「西番語の形態素連続は、多くの場合、単に漢文をそのまま置き換えた連続であり、もはやチベット語として十分に理解できない程度にゆがめられた形をとっている」[西田 1970, p. 122]。『女真館訳語』の永樂十二年から嘉靖五年の 112 年間に亘る 36 件の「来文」についても、漢語の語順に転換されている[Kiyose 1977, pp. 151-155]。

漢語の語順に沿って、あらゆる国の言語を直訳するというこの発想は、大元ウルス時代のモンゴル語直訳法に由来する。全くの失敗に終わったが、明朝廷は、世界の共通言語をモンゴル語から漢語に移行させるという意図を、おそらく乙種本『華夷訳語』の編纂時期のある段階では、もっていた。漢語を中心に据え、そのシステムを四夷館において教育しようとした(華夷思想の建前上、そうしたポーズをとっただけかもしれないが)。これらの「来文」が従来通りモンゴル語の語法にしたがって直訳されていたならば、ウイグル語、女真語の語順が意味をなさないほど乱れたはずはない。また、逆にいえば、「来文」の漢語直訳体モンゴル文、ウイグル文、ペルシア文、チベット文等が口語でありえなかったのと同様、モンゴル時代の直訳体漢文も、じっさいの口語ではなかったのである。

六. 李朝の語学教育 —— モンゴルの遺産 II

(1) 高昌偈氏と司訳院

高麗の後を受けた朝鮮においても、翻訳システムの整備は、太祖李成桂の即位早々に始められた。二年九月には司訳院が設置され、漢語を学ばせることになった。⁽⁴⁵⁾当初は、至正末期に戦乱を逃れてやってきた、いわゆる漢人、南人の

(45) 『太祖康獻大王実録』巻一[元年壬申八月辛亥]、巻四[二年癸酉九月]、巻四[二年癸酉十月己亥]。

韓昉,⁽⁴⁶⁾ 李原弼, 龐和, 荊華, 洪楫, 唐城, 曹正 [『世宗莊憲大王實錄』卷九三 [二十三年辛酉八月乙亥]] および高昌ウイグルの名門貴族の末裔僕長寿等が指導にあたった。

翌三年には、司訳院提調であった僕長寿は、同僚とともに李成桂に次のような上奏をしている。

我国家世事中国, 言語文字, 不可不習. 是以殿下肇国之初, 特設本院, 置祿官及教官, 教授生徒, 俾習中国言語音訓文字体式, 上以尽事大之誠, 下以期易俗之効. 臣等今以將擬議到習業考試等項, 合行事務, 開写于後;

一. 額設教授三員内, 漢文二員, 蒙古一員, 優給祿俸 . . .

一. 習業生徒, 鮮有自願來者, 令在京五部及各道界首府州, 択良家子弟十五歳以下天資明敏者, 歳貢一人.

一. 毎三年一次考試, 勿論は無本院生徒七品以下人, 但能通曉四書, 小学, 吏文, 漢蒙語者, 俱得赴試. 習漢語者, 以四書, 小学, 吏文, 漢語皆通者為第一科 . . . 習蒙語者, 能訳文字, 能写字様, 兼写偉兀字為第一科; 只能書写偉兀文字并通蒙古語者為第二科 . . . [『太祖康獻大王實錄』卷六 [三年甲戌十一月乙卯]]

中国との外交にあたって、漢語の教育が急務としてとりあげられるいっぽうで、ひきつづきパスパ字、ウイグル字モンゴル語に通じる者も必要とされたのである。良家の十五歳以下の子弟を選んだのだから、とおい将来をも睨んだ外交策とみてよい。モンゴル語の指導も、僕長寿が当たった。

僕長寿の伝およびその世系については、すでにさまざまな論考があることでもあり、⁽⁴⁷⁾ 詳しくは述べないが、祖父のセチェクトウ (僕哲篤) は、大元ウルス治

(46) 『世宗莊憲大王實錄』卷九四 [二十三年辛酉十月乙酉] “竊照本国僻在東陲, 語音与中国殊異, 必資通訳, 乃能伝命. 在先元朝之季, 南人韓昉, 李原弼等輩僻地出来, 訓晦生徒, 謹備事大之任. 其後本人相繼淪没, 無有教訓之者, 漢音伝習, 漸致差訛. 慮恐尙有宣諭聖旨, 難以曉解; 朝廷使臣到国, 應對言語, 理會者少, 深為未便”.

(47) 『高麗史』卷一一二「僕遜伝」, 『定宗恭康王實錄』卷二「元年己卯十一月乙卯」, 『世宗莊憲大王實錄』卷二七「七年乙巳正月丁亥」, 『金華黄先生文集』卷二五「合刺普華公神道碑」, 賀・狄 2000, 朴 1996, 黄 2001 等参照.

下において、兄弟五人で同時に進士の第に登ったことで知られ[『至正直記』卷三「高昌偃哲」]、吏部尚書、江西行省の右丞をもつとめた。父の偃百遼遜(セヴィルス?後考を俟つ)は至正五年の進士で、応奉翰林文字、宣政院断事官等を歴任、端本堂で皇太子の経筵講義にもあずかったが、至正十九年、戦乱を避けて、端本堂で付き合いのあった恭愍王を頼って、高麗に移った。このとき長寿は十九歳、眉寿は十七歳。大元ウルスの朝廷文化を担った名門貴族の子弟であり、翻訳、出版のノウハウは知り尽くしていた、といってよい。しかも、高昌ウイグルは、数カ国語を話すポリグロットであることが当然であった。長寿、眉寿ともに帰化してのち、朝鮮語をもあらかたものにしたという。だからこそ、偃長寿は辛禡十四年(1388)の政変に大きな役割を果たし得たのであり、高麗、朝鮮の代表として明朝廷へ八度も派遣されたのである。ぎゃくに明朝廷から高麗に派遣されたのも、偃百遼遜の弟、セルギス(偃斯)であった。また、世宗のもと、パスパ字からハングルを作り出した[Finch 1999, 照那斯図・宣2001]メンバーのひとり、偃慶寿の子、つまりは偃長寿の甥、偃循である。偃循は、『三綱行実図』の編纂や『孝行録』の改撰にも携わった。まさにモンゴル朝廷の図像の『孝経』、『列女伝』の出版事業の踏襲であった[宮2002, 宮2004]。

なお、偃氏以外にも、朝鮮初期の外交官として活躍した趙胖などは、大元ウルス治下、大都で漢文を学び、モンゴルの書語に通じ、ときの丞相トクトの目にとまり、中書省で訳史に任じられていた履歴をもっていた[『太宗恭定大王実録』卷二「元年辛巳十月壬午」]。

朝鮮初期の漢語のテキストとしては、『老乞大』、『朴通事』、『前後漢』等の書が用いられた。しかし、その内容が、「俚近俗語」であって学ぶ者が嫌がったので、偃長寿が漢語で小学を解釈した『直解小学』をものした。中国の儒学者に見せても恥ずかしくない出来映えだったと言われ、ながく使用された[『世宗莊憲大王実録』卷九三「二十三年辛酉八月乙亥」,『成宗康靖大王実録』卷二〇〇「十八年丁未二月丁丑」]。『直解小学』は、こんにち現物が伝わらず、ふつうの口語だったのか、セヴィンチ=カヤの『孝経直解』のような直訳体であったのか、た

しかめる術がない。わかっていることは、のち成宗十四年(1483)に、葛貴が『直解小学』を見て、“(反)[翻]訳は甚だ良けれども、間に古語有りて、時用に合わず。且つ是れ官話ならず、人の聴きて認むる無し”[『成宗康靖大王実録』卷一五八[十四年癸卯九月己未]]といい、明の副使の許可のもとに燕京で改訂したいと願い出ていること、李辺の『訓世評話』(名古屋蓬左文庫蔵)の末尾に付せられた表文に、“直解小学は、節を逐って解説し、常用の漢語に非ざる也”とあること、『伍倫全備諺解』の序文に“本業三書、初め老・朴及び直解小学を用い、中古、小学の漢語に非ざるを以て、此の書に易う”とあることのみである。

『太祖康献大王実録』中に見える倭長寿自身の漢語は、いずれも元刊本の雜劇の台詞に類似しこそすれ、直訳体ではない。漢人、南人の韓昉、李原弼等も同僚であったのに、なぜ彼等はわざわざ旧本『老乞大』、『朴通事』を漢語の教科書として採用したのか(いわゆる南人の言語体系は、こんにち多く元刊本、五山版で当時そのままの状態で残る禅僧の語録に見ることができる。中峰明本、笑隱大訢といった著名な僧侶は、カアン、諸王、モンゴル貴族の庇護を受けていた)。

旧本『老乞大』、『朴通事』は、朝鮮王朝建国以降ずっと版木が作成されず、伝写によって学ばれていた。世宗の五年すなわち永樂二十一年(1423)になってはじめて、司訳院は、これらの書を鑄字所で刊行されるように請うたのであった。⁽⁴⁸⁾三年後には、“訳学の任は言語を大と為す”との認識にもとづき、正月・四月・七月・十月の一日の試験は『老乞大』、『朴通事』、『小学』、『孝経』、『前後漢』、『魯齋大学』の暗誦、『四書』、『詩』、『書』、『古今通略』については臨文講試のみ(従来は全教材の臨文講試、暗誦が課せられた)と定められた[『世宗莊憲大王実録』卷三三[八年丙午八月丁丑]]。さらに十六年(1434)には、漢学の奨励案として、経書、『通鑑』は、従来のように書物の内容、毀誉褒貶、微言大義の思索を重視するのではなく、音訓の正誤と、大意要約のみが試験されるよう

(48) 『世宗莊憲大王実録』卷二〇[五年癸卯六月壬申]“礼曹據司訳院牒呈、啓；老乞大、朴通事、前後漢、直解孝経等書縁無板本、読者伝写誦習、請令鑄字所印出。從之”。

になった。漢語の翻訳は、『直解小学』は正月・四月・七月・十月の一日に、『老乞大』は春、秋二回、『朴通事』については、秋冬二回暗誦の試験が課された。『經国大典』卷三「礼典」も述べるように、この三書がとくに重視され、『魯齋大学』（許衡『直説大学要略』）、『成斎孝経』（セヴィンチ=カヤ『孝経直解』）、『前後漢』等の“不緊の書”については、試験科目とはならなかったのである[『世宗莊憲大王実録』卷六三〔十六年甲寅二月庚午〕]。そして、この決定にあわせて、鑄字所が印刷した『老乞大』、『朴通事』がおそらく旧本のままで承文院、司訳院に頒行された。“此の二書は、中国語に訳すの書なり”と、『実録』はいう[『世宗莊憲大王実録』卷六四〔十六年甲寅六月丙寅〕]。

ところが、このおなじ世宗十六年(1434)の二月には、承文院事の李辺、金何が遼東へ『直解小学』の疑問箇所について質しに派遣され、その調査結果にもとづいて、三日ごとに世宗への『直解小学』の進講がはじまった[『世宗莊憲大王実録』卷六三〔十六年甲寅二月甲寅〕、卷六四〔四月己酉、五月甲午〕]（七年後に、『直解小学』が二百部印刷、頒行されているが、遼東での調査が反映されたテキストかどうかは不明である[『世宗莊憲大王実録』卷九四〔二十三年辛酉十月辛巳〕]）。李辺の言によれば“『老乞大』、『朴通事』は多く蒙古の言を帯び、純たる漢語に非ず、また商賈庸談有り、学ぶ者これを病む”という（ただし、商賈庸談を卑しむのは建前にすぎない。じっさいには、司訳院の判官、注簿たちは、一千匹にものぼる馬を連れ、遼東で売買、貿易を行っていた[『世宗莊憲大王実録』卷二二〔五年癸卯十月〕等]）。そして、李辺自身が著した漢語の教科書『訓世評話』には、句末の“有”はみえない。李辺は、漢語ができる人がいると聞けば必ず訪問して指導を仰いでいたといい、じっさいの漢語と『老乞大』、『朴通事』の言語の乖離は認識されていた。両書が“皆元朝の言語”であるため、わからない部分を中国に入朝した時に聞き合わせてきた『質問』も編まれていたのである[『老朴集覧』凡例]。にもかかわらず、そのごも旧本『老乞大』、『朴通事』が刊行、使用されつづけた[『世祖恵莊大王実録』卷一一〔四年戊寅正月戊寅〕]。しかも、申叔舟（『海東諸国紀』の編者とし

て名高い)、李辺等によって新たに編纂された『直解童子習』、『訓世評話』は、⁽⁴⁹⁾承文院で店晒しになっていた。成宗十一年(1480)、すなわち成宗の命令を受けた李昌臣が頭目の戴敬のところへ『老乞大』、『朴通事』の漢語の質問に行き、“此れ乃ち元朝の時の語也。今の華語と頗る異なり、多く未だ解せざる処有れば、即ち時語を以て数節を改めれば皆解読す可し。請うらくは、漢語を能くする者をして尽く之を改めせしめんことを。^{ききごみ}曩者、領中枢の李辺は高靈府院訓の申叔舟と華語を以て作りて一書を為す。名づけて訓世評話という。其の元本は承務院に在り”といわれてはじめて、『訓世評話』の刊行、『老乞大』、『朴通事』の刪改が命ぜられるのである[『成宗康靖大王実録』卷一二二[十一年庚子十月乙丑]]。それは、なぜなのか。

また、改訂の気運が高まって三年後、成宗の命令により、迎接都監郎庁の房貴和が大明の使節団に随行してきていた頭目の葛貴に傳いて『老乞大』、『朴通事』の改訂、校正にあたり、さらに『直解小学』についても指導を仰いだが、葛貴はこのように断った。

(49) 『東文選』卷九四成三問「童子習序」に“我東方在海外，言語与中国異。因訳乃通。自我祖宗事大至誠，置承文院掌史文，司訳院掌訳語，専其業而久其任。其為慮也，蓋無不周。第以学漢音者，得転伝之余，承授既久，訛繆滋多，縦乱四声之疾舒，衡失七音之清激，又無中原学士從旁正之，故号为宿儒老訳，終身由之而卒於孤陋。我世宗，文宗慨念於此，既作訓民正音，天下之声，始無不可書矣。於是訳洪武正韻，以正華音。又以直解童子習，訳訓評話，乃学華語之門戸，命今右副承旨臣申叔舟，兼承文院校理臣曹彦安，行礼曹佐郎臣金曾，行司臣孫寿山，以正音訳漢訓，細書逐字之下，又用方言，以解其義。仍命和義君臣瓔，桂陽君臣瓚，監其事，同知中枢院事臣金何，慶昌府尹李辺，証其疑而二書之音義昭晰，若指諸掌，所痛恨者，書僅成編，弓劍繼遺，恭惟主上嗣位之初，遙追先志，亟令刊行，又以臣三問，亦嘗參校，命為之序”とある。成三問の没年が1456年であること、『洪武正韻訳訓』の申叔舟の序が1455年に書かれていることから、『童子習』の直解本も1455年成立とみてよいだろう。この書は、1469～85年成立の『経国大典』卷三「奨勸」に見える承文院の教科書のなかにもみえている。もとの『童子習』とは、大元末期から明初にかけて活躍し『牧民心鑑』の著者でもある朱逢吉の作で、少なくとも永楽二年には建安郡守の指示で、建陽で刊行されていたことがわかっている。いっぽうの、『訓世評話』も、『成宗康靖大王実録』卷三一「四年癸巳六月壬申」の記事によって、1473年に成立していたことはまちがいない。

頭目の金広は我を妬む。副使の讒を聴くを疑う。故に我、先に還らんことを欲す。恐らくは讐校すること難し。若し人を使って朴通事、老乞大を改正するの意を謝し、以って副使の心を回せしめれば、則ち我も亦、保全たり
[『成宗康靖大王実録』卷一五八[十四年癸卯九月庚戌]]。

そこで、成宗自らが宴席を設け、大明からの使節の副使金興(正使の鄭同は病気のため欠席)に外交のために正確な語音を学ばせたいこと、“真是好秀才”の葛貴が来朝したこの機会を利用して字韻の質問を行いたいのので、葛貴が協力してくれるように副使の口ぞえをお願いしたいと、諒解を求めなければならなかった。すでに内密にすすめていた『朴通事』、『老乞大』の改訂については、言及しなかった。上記の要求について、副使はいちおう了承したが、“我言わずと雖も、彼は必ず心を尽さむ”と、自分に無断でことを進めていた朝鮮と葛貴に対して皮肉をいっている。そうした副使に対して葛貴は“俺は南方人にして、字韻正しからず、恐らく差誤有り”と気の進まぬふりをしてみせている。なぜ、葛貴はこのように明の使者を気にしなければならなかったのか。また、なぜ明の使者は、漢語に巧みな葛貴が『朴通事』、『老乞大』を改訂することを嫌がったのか。けっきょく、このとき『直解小学』は、先述したように金興に一部贈呈され、葛貴が燕京で改訂することになったが[『成宗康靖大王実録』卷一五八[十四年癸卯九月己未]]、六年後に成宗は権五福を明朝の旧文官で遼東に引退していた邵奎のところに派遣、そこから諺解本『直解小学』を編纂しているので、葛貴からは音沙汰なしだったか、送られてきたにしても、きわめて不十分なものであったと見られる[『成宗康靖大王実録』卷二三五[二十年己酉十二月己丑]]。

なお、「漢兒言語」論者によれば、旧本『老乞大』の漢語をじっさいに話していたはずの、朝廷の使臣が頻繁に往復する国境の義州においても、1428年12月の時点で既に、“訳語を訓導する法無く、訳語に通じる者、甚だ少な”きが故に、平壤府の例に倣って訳学訓導を置き、義州近隣の官僚に漢文、漢語を教えることが決定されている[『世宗莊憲大王実録』卷四二[十年戊申十二月甲申]]。義州には、モンゴル、女真、契丹、朝鮮さまざまなひとびとのコロニーが混在

したが、かれらの共通語は漢語ではなかった。それに司訳院の人々がしばしば漢語学習のために赴いた遼東の漢語にしても所詮は方言であり、北京のことばと比べると“音正しからず”であった。それが現実であった。

(2) 大明国と朝鮮の冷たい外交——モノと言語の断絶

洪武二十九年(1396)春二月、朝鮮は、正月の賀に贈った表箋の文辞が“輕薄戲侮”であるとの咎めをうけ、その撰文者を南京に護送させられ、使者団も拘束されるはめになる。朝鮮側は礼部に対し“小邦は海外に僻居し、声音言語は、中華に類せず、必ず通訳に憑る。僅かに文意を習い、学ふ所は粗浅、措辞は鄙陋にして、且つ表箋の体制を尽悉すること能わず、以て言詞の輕薄を致す”と弁解する[『太祖康献大王実録』卷九[五年丙子二月癸卯]]。その返事として、洪武帝の聖旨を伝えた礼部の咨には、“前者進むる正朝の表箋の内に、不停当の字様多く有り”とある[『太祖康献大王実録』卷九[五年四月乙未]]。

洪武三十年三月の朝鮮宛ての宣諭聖旨には“^{なんじ} 你の^{そちら} 那里的使臣が再び来る時は、^{キタイ} 漢児の話の^{わか} 省る^{もの} 的^{かれ} が^つ 他に^{ちつとも} 着いて来い。一^{もの} 発^{くる} 省^な らない^{わたし} 的^{こちら} は^の 不要^こ 来。我の^{こども} 這裏の^{こども} 孫児が^{こども} 朝鮮国王の^{こども} 孫児と^{けっこん} 倣親するを^の 肯^の ん^{とき} ず^{かれ} る^{わか} 的^わ 時^わ 節^わ は、他に漢児の話の省り得る宰相を著けて来い”という。この聖旨と同時に権近がもちかえった明朝礼部の咨文の一つにも“奉聖旨；今後差使臣来时，要通漢人言語的来。不通漢人言語的，不許来”[『太祖康献大王実録』卷一一[六年丁丑三月辛酉]]とある。とすると、それ以前は、漢語のできない使節団が派遣されていたことになる。高麗時代と同じくモンゴル語が公用語として用いられていたか、漢文による筆談のみですませたか、⁽⁵⁰⁾ 明朝廷の朝鮮語を解する者が通訳にあたっていたかの、いずれかしもありえない。この時期、朝鮮への使者として、宋ボロト、楊テムルといった、モンゴル名をもつ者が派遣されている場合が多い事実からすれば[『太祖康献大王実録』卷九[五年丙子]]、ひとつめの可能性が高いだろう——そも

(50) 『太祖康献大王実録』卷一四[七年戊寅六月丁未]“尹須，尹珪，孔俯三人都不通中国語音，雖会写字，又不深知文義”。

そも李成桂の父祖自体、皆モンゴル名をもち、大元ウルスによって職を保証された家柄である。明朝廷は、しばしば、朝鮮の使者に漢語の使用を押し付け、また送られてくる漢文に難癖をつけたのだが、それにもかかわらず、留学生の受け入れには全く乗り気でなかった。貿易の厳禁も、通事等からじゅうらいの役得(王朝公認で私的に売買を行い、多大な利益を得ることができたので、一年に二度派遣されても嫌がらなかったという)を奪い、司訳院の学生のやる気を削いだ。なお、同じ朱元璋のことばであるにもかかわらず、宣諭聖旨と咨文で言い方がことなるのは、前者の聖旨はモンゴル語で、後者は礼部が皇帝の発言をそのまま記録、送付しているからだろう。その証拠に永楽三年(1415)の九月に朝鮮に下された長文の宣諭聖旨は、朝鮮領内の豆万江に拠点をもつ女真衛の童モンケ＝テムルの参内を促す内容だが、いずれも、句末の“～有”、“～的上頭”など、直訳体の特徴があらわれている。この二通は、万戸の童モンケ＝テムル、千戸の王ジャファーディに見せることを前提として書かれているので、とうぜん原文はモンゴル語であった[『太宗恭定大王実録』巻一〇[五年乙酉九月庚戌]]。むしろ使用されている文体から、その文書が何語で発令されたか判断する指標となりうる。『実録』の編者が文体を統一しないのも、意図してのことだろう。

さて、永楽十四年(1416)、朝鮮政府は、医、楽、訳の三学について、京師に留学生を送り込む議案を太宗に奏上したが、許可されなかった。その理由がふるっている。“今の(永楽)帝は疑慮多し。本朝の人至れば、必ず内豎を令て暗察せしむ。元朝の混一の時と比す可からず”と[『太宗恭定大王実録』巻二四[十二年壬辰十月戊寅]]。また、宣徳八年(1433)には、世宗が子弟を北京の国子監もしくは遼東の郷学に入学させることを請うたが、明皇帝は、「はるか遠く気候も異なる異郷の地で長期滞在は体力的に無理があり、ホームシックにも罹るから、本国で勉強したほうがよい」と断り、かわりに『五経大全』、『四書大全』、『性理大全』を各一セット、『通鑑綱目』を二セットあたえた[『世宗莊憲大王実録』巻六一[十五年癸丑九月壬午]、巻六二[十五年癸丑十二月壬戌]]。しかし、明朝廷で刊行された口語の教科書となりうる書は与えていない。明太

祖の勅命によって熊鼎、朱夢炎等儒者が俗語で編纂した『公子書』、『務農技藝商賈書』、『永鑑錄』、『歷代駙馬錄』、『⁽⁵¹⁾ 國朝忠伝』、『永樂大典』卷四八五、四八六など、口語で書かれた書物もそれなりにあったにもかかわらず、さらに下って天順四年(世祖大王六年／1460)にも、しばしば咎めを受けている文書の応対における過誤を避けるため、また韓昉、李原弼、洪楫、僕長寿といった開國期に訳学生を指導した人々が全て鬼籍に入ったことを理由に、漢、唐代から宋、大元時代に至るまで、新羅、高麗いずれも子弟を派遣して吏文、漢文を学ばせた旧例に従い、留学生の派遣を求めたが、退けられている。その言い訳というのが、“我が朝は祖宗以来、此の制度を行わず、^{いわ} 矧んや今の王国の詩書、礼義の教えは、伝習に素有り、表箋、章奏と夫の行移の吏文は悉く礼式を遵ふ。未だ尽く漢音に通ずること能わずと雖も、而るに通事の伝訳は未だ嘗て論ならざることなし。又何の必ず子弟の学びに來たりて、然る後誤り無きを為さん哉！”なのだから、自己矛盾も甚だしい[『世祖惠莊大王実録』卷二〇[六年庚辰五月丙戌]、卷二一[六年庚辰八月己巳]]。その直後の「ならば、『洪武正韻』を下賜されますように」との要求にも、“査得；印版原在南京国子監収貯、即今不曾印有。見在無從給与”と断っている[『世祖惠莊大王実録』卷二五[七年辛巳、八月乙未]]。ようするに、朝鮮からの留学生は受け入れられなかったし、漢土の正音を広めるつもりもさらさらなかった。朝鮮側もそれを察しており、『洪武正韻』もじつは遅くとも世宗の時点で内々に入手、ハンゲルの解説書まで作製していたのだが、半分は外交の体面として、半分は嫌がらせとして、何度も留学生の受け入れを申請したのだった。⁽⁵²⁾

(51) 『明太祖実録』卷二一[丙午十一月壬辰]、卷二三〇[洪武二十六年十二月]、『四庫全書総目提要』卷一三一部[雑家類存目八]。

(52) 『世宗莊憲大王実録』卷一二七[三十二年戊辰閏正月戊申]“命直集賢殿成三問、応教申叔舟、奉礼郎孫寿山、問韻書于使臣。三問等因館伴以見、使臣曰；「是何官也」。金何曰；「皆承文院官員、職則副知承文院事也」。指寿山曰；「此通事也」。鄭麟趾曰；「小邦遠在海外、欲質正音、無師可学。本国之音、初学於雙冀学士、冀亦福建州人也」。使臣曰；「福建之音、正与此国同、良以此也」。何曰；「此二子欲從大人学正音。願大人教之」。三問、叔舟將洪武韻、講論良久”。注(49)も参照。

明朝廷はとにかく間諜の出入、モンゴルと朝鮮が結び付くことを異様に恐れ神経を尖らせた政権であった。朝鮮が女真とともに五百数名で鴨緑江を渡ったというのは、大騒ぎし、李朝の使臣に対して、書籍の売買も禁じた。大元ウルスと高麗の結び付きの記憶は、まだなまなましかった。明の太祖も、大元ウルスに倣い朝鮮を駙馬国として取り込む目論みはもっていたのだが、朝鮮にその気が全くなかったのだった[『太祖康献大王実録』巻一〇〔五年十一月丁丑〕、〔六年夏四月己亥〕]。『明実録』が朝鮮の拒絶に遭ったことを秘して語らないのは、よほどの恥辱と考えられたからであろう。いっぽうの朝鮮も、中国の使臣に自国の編纂物や古典籍に“東人”が序跋をつけたものは、閲覧させないように、という命令を王が直々に下していた[『世祖恵莊大王実録』巻三二〔十年甲申二月乙巳〕]。朝鮮のじっさいの国内外に関する地理知識、政治認識が如何に詳細なものであるか、裏ルートによる中国書籍、物品、情報の入手が如何に頻繁になされているか、明朝廷に悟られまいとしたのである[宮 2003, 宮 2004]。

もっとも明朝廷の懸念は、根拠のないことではなく、土木の変の直前の正統七年(1442)、オイラトのエセンは、モンゴルのカアンであるトクト＝ブカの勅書(トクト＝ブカ即位の十年二月五日付け。パスパ字モンゴル語、黄色の薄紙に、方周尺五寸ばかり——約 15 cm 四方の印を捺してあったという)を朝鮮に遣わし、クビライと高麗王以来の結び付きを訴え、“人力を用い城を築きて即位したる大明皇帝”をとるか、“天が王印を賜わりし蒙古皇帝”をとるか迫っている。モンゴルは、大元ウルス時代のままに、朝鮮を高麗と呼び、北京を大都と呼んでいた[『世宗莊憲大王実録』巻九六〔二十四年壬戌五月癸亥〕]。朝鮮は明、モンゴルの情勢(のちには女真も含む)をつねに客観的に観察し、さまざまなルートによる報告にもとづいて外交を進めた。

明と朝鮮の交流は、通念とはことになって、決して良好なものではなかった。

この状況は、そのごも変わらなかった。たとえば、朝鮮の成宗八年、すなわち成化十三年(1477)には、右議政の尹子雲が自身の撰した『蒙漢韻要』一卷を進呈、頒行を請うたさいにも、“此の書は、蒙古、漢語を具載し、而して訳する

に諺文を以ってす。若し中国の之を見れば、我を以って野人と交わり通ずと為す。義州に於いて頒すること宜しからず”と進言しておくことも忘れなかった[『成宗康靖大王実録』巻八四〔八年丁酉九月戊辰〕]。さらに中宗の十年(1515)に、柳洵はおおよそ次のように述べている。

明への奏請通咨には、つねに吏文を用いるが、明朝廷から使者が来て、文官とのやりとりの間に文書をもちだす必要があった場合、その文字の音韻に通曉していなければ、応答するすべがなく、呆然と目を見開いて、使者にあざ笑われてしまうことが多い。子弟を入学させて吏文、漢語を習わせて、代々伝授していけば、漢音、吏文に通じる者も絶対に増えるだろう。このお上のお考えはまことに至当なのだが、子弟の入学は、前朝よりのち、行われていない。世宗の時にも、申請したが、明朝廷は結局許可しなかった。おそらく外国のものが長く京師に留まって、中国の事をスパイするのを喜ばないためだろう。ましてや現在、中原では大事件が多発、朝政も次第に乱れ、国子監の教育もおろそかになって、昔のようなわけにはいかないに違いないのだから、外国人に現状を知られたくはないだろう。結局、許可されることは難しいし、だめなことがわかっている以上、申請を試みても、ただ揉め事を増やすだけのことだ。しかし、現在、文臣の中で吏文、漢音に通曉している者とはといえば、承文院の崔世珍だけで、彼がいなければ、明朝廷への奏咨文書の作成、やりとりはお手上げである。この点は、はなはだ憂慮すべきことで、一刻もはやく若手の文官に少数精鋭教育を施すべきだと[『中宗大王実録』巻一二三〔乙亥十年十一月丙申〕]。

しかし、そうして漢語教育を受け、習熟しているといわれる文官でも、実際に外交使節団に随行し、実地訓練とばかりに中国で漢人と会話してみると、通じない。何回も京師に赴いて専心修行してこそ、通用するようになるのだが、何度も同じ文官を派遣すると、礼部に疑惑をもたれてしまう。結果、1536年の段階でも、御前の通事としての任に堪える者は絶無、であった[『中宗大王実録』巻八一〔丙申三十一年二月庚戌〕]。

ひるがえって、『世宗莊憲大王実録』卷四七〔十二年庚戌(1430)三月戊午〕、『経国大典』(1469～1484年成立)卷三「礼典・奨勳」にあげられる吏文を扱う承文院の官員が毎旬、講読に用いたテキストは、『朴通事』、『老乞大』のほか、『魯齋大学』、『成斎孝経』、『前後漢』、『小微通鑑』、『吏学指南』、『大元通制』、『至正条格』、『直解小学』、『童子習』、『忠義直言』、『御製大誥』である。『成斎孝経』、『小微通鑑』、『大元通制』、『至正条格』は、カラ＝ホトでもまとまって発見されている。大元ウルス朝廷より、エチナ路に駐屯、ないしエチナ路を通過するモンゴル諸王に下賜されたと考えられる。国家出版物は、モンゴル諸王、臣下に贈与されるほか、その書を必要とする各路、府、州の各官庁(多いときには三千箇所に及ぶ)にも配られ保管されるのが通例であったので、これらの書は、李氏朝鮮が集めたものではなく、モンゴルの駙馬国であった高麗王家に贈与されていたものをそのまま入手した、と見るのがいちばん自然だろう。李世桂をはじめ朝鮮王朝初期の有力スタッフは高麗恭讓王の経筵を担当していたのである。ただし、これらの書は当時いずれも建安の小字本で購入できた[宮 2003, pp. 77-80]。いずれにしても明代に編纂された書物はほとんど使用されてない。『朝鮮実録』および『攷事撮要』は、しばしば明朝より書物を下賜されたことを伝えるが、いずれも古典、雅文漢文でかかれたものばかりであった。朝鮮もあいかわらず大元時代編纂の書籍を漢語のテキストとして使用することを選び、古典およびその注釈書についても、明朝廷にはあえて大元時代の版本から印刷した刊本を要求した。朝鮮治下の各地の官庁で作成された版本の多くも、元刊本にもとづいていた。明朝廷の編纂物が如何に使用に堪えないお粗末なものであったかをものがたる。じっさい、明弘治元年杭州刊本『古史通略』(台湾国家図書館蔵)などは、元刊本の『纂図音訓明本古今通略句解』(台湾国家図書館蔵)の完全な剽窃であった。

そして、なによりも注目すべきことは、1478年にいたってもなお、朝鮮では『大元通制』、『至正条格』が吏文のテキストとして用いられ、しかも印刷されて

いた事実である⁽⁵³⁾。いずれも、大元ウルス朝廷によって出版された政書であり、直訳体の聖旨、公牘が多く含まれている。

以上みてきたように、政治情勢からも、所蔵の書籍の制約からも、司訳院のメンバーが旧本『老乞大』の言語がじっさいの口語でないことを知っていようが知るまいが、公式な漢語のテキストとしては、これを使わざるを得ない状況にあったのである⁽⁵⁴⁾。

(3) モンゴル語教材について

さいごに、『世宗莊憲大王実録』巻四七〔十二年庚戌三月戊午〕、『経国大典』巻三に掲載される司訳院のモンゴル語のテキストについても、以下検討しておきたい。なお、書名のあとに、モンゴル語を漢字表記したと考えられるものについては、『経国大典』より少し前の世宗三十年(1448)に刊行された申叔舟、成三問等の『東国正韻』による朝鮮漢字音を付し、()内には『経国大典註解』後集下巻「礼典」(明宗九年/1554 年安瑋序刊本)の記述を記す。司訳院のモンゴル語教科書の内容推定、モンゴル語原題の復元のさい、じゅうらいほとんど参照されず、考証も十分とはいいがたいので、あえて煩を承知で紹介しておく[李 1967, pp. 104-110, 鄭 1988, pp. 55-58, 鄭・尹 1998, pp. 55-58, 64-65]。

(53) 『世宗莊憲大王実録』巻二二〔五年癸卯十月庚戌〕、『世宗莊憲大王実録』巻九四〔二十三年辛酉十一月己亥〕、『成宗康靖大王実録』巻九八〔九年戊戌九月庚午〕。なお、崔世珍も『朴通事集覧』巻中において、“金字圓牌”を解説するさいに、『至正条格』を参照している。なお、2003年に、韓国精神文化研究院によって、慶尚北道慶州の孫氏宗家に保存されてきた千件余の遺物の中から、『至正条格』の「断例」と「條格」の一部が発見された。『中央日報』WEB版掲載の書影からすると、原本は、『元典章』と同様、建安の小字本で、それを覆刻したものと思われる。

(54) とはいえ、たとえば『世宗莊憲大王実録』巻五八〔十四年壬子十二月丙午〕に、永樂八年(1410)の宣諭聖旨が直訳体の文体で引用されているが、句読点の切り方にかなり誤りがみられる。成三問や申叔舟等によってこの『実録』が編纂された1454年から刊行年の1472年あたりともなれば、朝鮮でも直訳体をきちんと読める人がいなくなりつつあったのかもしれない。

○『章記』chiang kih (集元皇帝聖旨)

モンゴル語で、“集成”をあらわす Janggi の音訳だろう。『元朝秘史』では“掌吉”と書かれるが、“聖旨の集成”の意識も兼ねて“章記”の字を特に選んだと考えられる。『元史』卷二九「泰定帝本紀」に、“[元年春正月]甲辰，勅訳列聖制詔及大元通制，刊本賜百官”とある。また，文宗トク＝テムルの開いた奎昌閣においてモンゴル語書籍の印刷を担当した広成局が『皇朝祖宗聖訓』と翻訳版『大元通制』を刊行している。『章記』がこの『皇朝祖宗聖訓』を指す可能性はもちろん，『皇朝祖宗聖訓』は『列聖制詔』の復刻，重刊本なのかもしれない。⁽⁵⁵⁾

○『帖月真』t'əp uərh chin, 『孔夫子』(皆翻訳小児論)

I 『帖月真』

『世宗莊憲大王実録』卷一九[五年癸卯二月乙卯]に“礼曹啓；蒙古字学有二様，一曰偉兀真，二曰帖児月真。在前詔書及印書，用帖児月真。常行文字，用偉兀真，不可偏廢。今生徒皆習偉兀真，習帖児月真者少。自今四孟朔，蒙学取才，並試帖児月真，通不通分数，依偉兀真例。從之”という。偉兀真はウイグル文字(Uighurjin)，帖児月真はパスバ字＝方形字(dörbeljin)を指す(『華夷訳語』は“朶児迦勒真”，『山居新話』は“朶児別真”と表す)。この記事は，1423年の段階でも，パスバ字モンゴル語を用いた外交文書がやりとりされていたことを示す。“帖月真”が“帖児月真”と同じであれば，パスバ文字の書き方の書物であって，『事林広記』中の「百家姓」のようなものが想定される。『註解』にいうように“『小児論』を翻訳したもの”であるならば，漢文本文をそのままパスバ字で音訳したものということになるのか。『文淵閣書目』卷一八には，『蒙古字訓』，『達達字母』，達達字の『孝経』，『忠経』，『仏経』，『達達字書』が記録されている。ただ，この達達字がパスバ字なのかウイグル文字なのかは，わからない。

(55) 『山居新話』“広成局，階從七品，置大使一員，副使一員，直長二員，司吏二名，專一印書籍，已上書籍乃皇朝祖宗聖訓，及番訳御史箴，大元通制等書”。

II 『孔夫子』

『新刊項橐小兒論』(明刊本)のほか、『歷朝故事統宗』(明万曆刻本)巻九や嘉靖万暦年間の類書の中に収録される「小兒論」、李卓吾の編集した『増補素翁指掌雜著全集』(康熙八年刊本)に『百家姓』などとともに附録として収められる『小兒論』などからすれば、弟子と出遊中の孔子が、目から鼻へぬけるような機知に富んだ幼い童と問答し、孔子がぐうの音もでないほどやっつけられる笑い話である。この説話の原型は、はやくはトルファンのアスターナの古墓から出土した唐代写本にも見られる[張 1986]。『文淵閣書目』巻一八によれば、女真字の典籍にも、『孔夫子書』、『孔夫子遊国章』、『家語』、『家語賢能言語伝』、『百家姓』、『女直字書』などがあったという。ちなみに朝鮮で使用された女真字の教科書にも『小兒論』がある。

○『何赤厚羅』ha chiək how ra (何赤, 華言恩也。厚羅, 華言報也。善惡報応之言)

『世祖実録』では、『賀赤厚羅』と記される。甲種本『華夷訳語』「人事門」に“報恩：哈赤 中合 舌里温(haci qari'un > haci qari'ul)”とある。ことによると、『成宗康靖大王実録』巻九八[九年戊戌十一月丙寅]に“伝于礼曹曰：童清礼家蔵蒙古世祖皇帝冊□一，知風雨冊一，善惡報応冊一，南無報大冊一，陰陽占卜冊一，福德智慧冊一，飲食燕享冊一，日月光明冊，陰陽擇日冊二，開天文冊一，真言冊二，仏経冊七，礼度冊一，勸学冊一等，其付司訳院伝習”とあるうちの“善惡報応”一冊ではないか。ちなみに，“福德智慧”は，十一世紀，ウイグル語で書かれた文学作品，ユースフ＝ハージブの“福楽智慧(クタドゥク・ビリク Qutad̡u bilig)”の可能性ある。現在ウイグル文，アラビア文の抄本がのこっており，モンゴル語に訳されていた可能性も十分にある。“蒙古世祖皇帝”は，おそらく泰定三年七月に経筵講義のために，翰林侍講学士の阿魯威，直学士の

オトチが訳した『世祖聖訓』⁽⁵⁶⁾だろう。あるいは、『十善福白史冊』かもしれない[留 1981]。いずれにしても司訳院に附与し習わせたというのだから、童清礼の蔵書は、すべてモンゴル語のテキストであったのではないか。

○『貞観政要』、『待漏院記』、『守成事鑑』、『御史箴』、『皇都大訓』(元翰林学士阿隣帖木児及忽都魯都児迷実等三人翻訳)

I 『貞観政要』

仁宗アユルバルワダがアリン＝テムル、チャガン等に命じて、モンゴル語に翻訳、刊行させたもの、文宗トク＝テムルが奎章閣に命じて翻訳、刊行させたものと二種知られている。いずれも、モンゴル以下の非漢民族の教科書として使用されたという。⁽⁵⁷⁾

II 『待漏院記』

宋の王禹称(字は元之)の『待漏院記』のモンゴル語訳を指すだろう。樓昉編『迂斎先生標註崇古文訣』(台湾国家図書館蔵元刊巾箱本)卷一六「宋朝文・王黄章」に収められるほか、『古文真宝』後集、『附音傍訓古文句解』(前田尊経閣蔵元刊本)乙集卷五にも見える名文である。大元ウルス時代では、趙孟頫筆『待漏院記』の存在が知られ、朝鮮でも屏風に仕立てたものが王宮

(56) 『元史』卷三〇「泰定帝本紀」“〔泰定三年秋七月〕乙卯，詔翰林侍講学士阿魯威，直学士燕赤訳世祖聖訓，以備經筵進講”，『元史』卷三〇「泰定帝本紀」“〔泰定四年秋七月〕戊戌，遣翰林侍読学士阿魯威還大都，訳世祖聖訓”。

(57) 『元史』卷二四「仁宗本紀」“〔至大四年六月己巳〕帝覧貞観政要，諭翰林侍講阿林鉄木児曰：“此書有益於国家，其訳以国語刊行，俾蒙古，色目人誦習之”，『元史』卷一三七「察罕伝」“嘗訳貞観政要以献。〔仁宗〕帝大悦，詔繕写徧賜左右。且詔訳帝範。又命訳脱必赤顔名曰聖武開天紀，及紀年纂要，太宗平金始末等書，俱付史館”，「曹元用墓誌」“三入翰林，預修仁宗英宗実録，蔵館中，奉旨雜編定国朝勅令，号大元通制，訳呉兢貞観政要，为国言。皆行于時”[胡・王 1983]，『元史』卷三六「文宗本紀」“〔至順三年夏四月〕戊午，命奎章閣学士院以国字訳貞観政要，鈐板模印，以賜百官”，『道園類稿』卷一七「貞観政要集論序」“天曆天子嘗命訳以国語俾近戚国人皆得学焉。久未成書，又以属集蓋租庸調府兵等法，今人多不尽晓，而李百葉賛道賦等又引用迂晦，遽不可了了。集為口授出處令筆吏檢尋，窮日乃得一，賦所引幾成一編，而訳者始克訖事以進，今閣下有刻本也”。

に飾られ愛玩された。この書がアリン＝テムルやクトルグトルミシュによってモンゴル語に訳されていたことは、じゅうらい、『元史』をはじめとする中国資料では知り得なかった。

Ⅲ『守成事鑑』

『元史』卷一六七「王恂伝」に、“成宗即位，献守成事鑑一十五篇，所論悉本諸経旨。元貞元年，加通議大夫，知制誥同修国史，奉旨纂修世祖実録，因集聖訓六卷上之”といひ、『秋澗先生大全文集』卷七九「元貞守成事鑑」に漢文原文が収録される。王恂の別の著作で，チンキムに献呈された『承華事略』も絵入りのモンゴル語訳本として，パスパの『彰所知論』とともに[Hoog 1983]，代々の皇太子，モンゴル諸王の教育に用いられ[『秋澗先生大全文集』卷七八，七九，附録，『滋溪文稿』卷九「馬文貞公墓誌銘」]，その伝統は清朝にまで受け継がれる[『欽定元王恂承華事略補図』（光緒二十二年武英殿刊本）「表」「提要」]。

Ⅳ『御史箴』

至大年間，監察御史であつた張養浩が、『風憲忠告』と併せてものした著作である。『風憲忠告』は、『牧民忠告』，『廟堂忠告』とともに，『三事忠告』（『為政忠告』）として知られているが，『御史箴』については，張起巖による「文忠張公神道碑銘」，『元史』の伝ともに言及していない[『張文忠公文集』（静嘉堂文庫蔵元刊本）付録]。こんにち，見ることができるテキストは，『憲綱事類』の付録（旧北平図書館蔵弘治四年刊本，名古屋蓬左文庫蔵嘉靖三十一年刊本）としてで，宣德四年に監察御史薛瑄が註解を施したものである。⁽⁵⁸⁾

- (58) 『憲綱事類』付『風憲忠告』『御史箴』（旧北平図書館蔵米国会図書館マイクロフィルム，弘治四年刻本）薛瑄「御史箴解序」“御史箴者，張文忠公所作也。公爲御史時，嘗著風憲忠告，以明風紀之要，又作是箴，并以致戒焉。大意謂御史之職，關係甚重，任是職者，当思其重，而爲所當爲，戒所当戒，其言簡，其理備，其詞直，其義切，誠憲臣之藁石也。公既没而其箴盛行於世。今内自台署，外及臬司，以至憲臣之家，靡不列之于屏于几”，周軫「憲綱事類後」“憲綱事類，監察御史太原陳公瑞卿巡按山東所刊行者，公持憲嚴甚，入而糾劾，出而歷歷，一遵憲綱成命。以是書頒自朝廷，得之者少，而或罹于咎，非但爲風憲者当知也。急急欲刊行之。又以元臣張養浩風憲忠告并御史箴，皆所以羽翼乎憲綱”。

この『御史箴』のモンゴル語版が、『大元通制』、『皇朝祖宗聖訓』と同様、文宗トク＝テムルのとき広成局で出版されていたことは、『山居新話』によって知られる〔前掲注(55)〕。

V『皇(都) [図] 大(川) [訓]』

もともとは経筵講義のために、紐沢、許師敬(許衡の息子)が編纂した『帝訓』という書物で、皇太子アリギバの教育のために、アリン＝テムル、クトルグトルミシュ、馬祖常、許師敬等によってモンゴル語訳され、書名も『皇図大訓』と改められる。⁽⁵⁹⁾ アリン＝テムルとクトルグトルミシュはウイグル貴族で、ともにアユルバルワダ時代から、数々の翻訳に携わった。『経世大典』の編纂にも与かった。⁽⁶⁰⁾

○『吐高安』t'o kow han (蒙古人名。戒其五子之言)

『世祖実録』は『土高安』と表記。五子を戒めるモンゴルの話としては、ふつつ即座にトブチャンすなわち『元朝秘史』のアランゴア Alan-qo'a を脳裏に浮かべるだろう。高安はたしかにゴア qo'a すなわち“～姫”と読めるが、現段階では“吐”の音の説明がつかない。音価のみならば、甲種本『華夷訳語』『器用門』“鍋：脱豁安” toqo'an が近い。

○『巨里羅』kə ri ra (狐名也。設為狐与獅牛問答之語、元学士者古斗訳)

“巨里羅”のモンゴル語への復元は後考を俟つ。gerel (甲種本『華夷訳語』

(59) 『元史』卷二九「泰定帝本紀」“〔泰定二年秋七月甲寅〕紐沢、許師敬編類帝訓成、請於経筵進講、仍俾皇太子觀覽、有旨訳其書以進”、『元史』卷三〇「泰定帝本紀」“〔泰定三年三月〕丙寅、翰林承旨阿璘帖木兒、許師敬訳帝訓成、更名曰皇図大訓、勅授皇太子”、『滋溪文稿』卷九「元故資德大夫御史中丞贈摠忠宣憲協正功臣魏郡馬文貞公墓誌銘」“公有文集若干卷、奉詔修英廟実録、訳潤皇図大訓、承華事略、編集列后金鑑、千秋記略共若干卷”、『道園学古録』卷二二「皇図大訓序」“皇図大訓者、前榮禄大夫中書右丞臣許師敬、因其先臣衡以修德為治之事嘗進説於世祖皇帝者而申衍之、而翰林学士丞旨榮禄大夫知経筵事臣阿璘帖木兒、奎章閣大学士光禄大夫知経筵事臣忽都魯都児迷失潤訳以国語者也”。

(60) 『道園学古録』卷五「経世大典序録」、『元史』卷一二四「哈刺亦哈赤北魯伝」、『道園学古録』卷一一「書趙学士簡経筵奏議後」。

「声色門」では“光：格舌連勅”，あるいは kerel (『元朝秘史』卷七 27a 4 では“關：客舌列勅”)などの可能性がある。gerel だとすれば、前述の童清札の蔵書“日月光明冊”だろうか。訳者の“者古斗”chia ko tuw は、ジャウクト Jagut あるいは、ヤークート Yākūt だろう。雅古(字は正卿)は、『秘書監志』によれば、也里可温人(エルケウン)、すなわちネストリウス派キリスト教徒であった。泰定元年より承事郎(正七品)をもって秘書監著作佐郎をつとめた。その後、すでに文官として経歴を積んでいたにもかかわらず、天暦の第に登せられ、至順元年の進士となる。文宗トク＝テムルの意に従い、名の表記を雅琥に改め、奎章閣の参書として仕えるが⁽⁶¹⁾、翌至順二年三月には御史台の弾劾によって罷免され、以後は広西清江路の同知、福建塩運司同知などを務めている。⁽⁶²⁾“学士”であったことを直接記す文献は、管見の限りではのこっていないが、『事林広記』(鄭氏積誠堂刻本)戊集卷上「官制門」《皇元朝儀之図》の解説に、“応奉翰林承務郎同知制誥兼国史院編修官雅古”とある。翰林応奉は、従七品であるから、泰定元年十一月二十六日に秘書監著作佐郎となる前の職と考えられる。とすると、英宗シディバラか、泰定帝イスン＝テムルの即位後に献呈された書ということになる。もっとも奎章閣学士院参書時代にトク＝テムルに献呈された可能性も否定はできない。いずれにしても、その経歴からすれば、このヤークートが本書の著者であることは、ほぼまちがいない。

○『伯顔波豆』pa ian pa tuw (将帥名。以其言故仍為書名。他倣此)

バヤン＝バートル Bayan ba'atur, すなわち南宋を平定し、成宗テムルの即位をバックアップしたバアリン部のバヤンの事蹟を著したものだろう。

(61) 南唐の趙幹「江行初雪図」(台湾故宫博物院蔵)には、天暦二年十一月の時点の奎章閣のメンバーのリストが付されており、雅琥は奎章閣学士院参書奉訓大夫として見える。石・葛 2001, pp. 28-29.

(62) 『秘書監志』卷一〇「題名」、銭大昕『元進士考』、『元史』卷三五「文宗本紀」、『馬石田文集』卷九「送雅琥参書之官静江序」、『安雅堂集』卷二「送雅古正卿同知福建転運塩使司事」、『吳正伝文集』卷八「送雅琥正卿福建塩運司同知」。

バヤンに付き従った暢師文が至元十三年に『平宋事蹟』を編纂して、『平金録』、『諸国臣服伝記』等とともにクビライに献上している⁽⁶³⁾ので、モンゴル語版が作成されたことは、たしかである。これらの書の内容は、のち『経世大典』政典「征伐」に取り入れられたと考えられる。

○『速八実』sok parh sirh (人名)

サキヤ=バクシ Saskya Baysi. Baysi は、博士あるいは師父を指し、“八合識”や“八哈石”と漢字表記されるのが普通である。『仏祖歴代通載』卷二二は“八哈石，北人之称，八哈石猶漢人之称師也”と解説する。パスバ字モンゴル語の契本『薩迦格言』(『善説宝蔵』)の版心には、「八失」とあり、まさにこの書を指すにちがいない[照那斯図 1991, pp. 195-211]。

○『王可汗』oang k'a yan (元太祖之先，可汗，華言天子之称也)

オン=カ(ア)ン Ong-qaqan > Ong-qan, つまり『元朝秘史』、『皇元聖武親征録』にいう汪可汗を指す。“太祖之先”という註解は、おそらく適切ではない。

○『高難加屯』kow nan ka d'on (加屯，華言皇后，即元太祖皇后，高難，其名也)

『註解』を信ずるならば、『元朝秘史』卷七に登場する中忽闌 中合敦 クラン=カトン Qulan qatun のことだろう。n と l の交替はじゅうぶんにあるからである。たとえば、『註解』と同時期の崔世珍がルビーについて述べた注にも“璣音作 𑖦 nal. 旧本作刺。元語作刺兒”とある[『朴通事集覽』上「紫鴉忽」]。クラン=カトンは、『集史』「チンギス=カン紀」にも第二皇后として挙げられる。実録の付録として編纂された

(63) 『元史』卷一七〇「暢師文伝」“[至元]十二年，丞相伯顔攻宋，選爲掾属，從定江南，及歸，舟中惟載書籍而已。十三年編平宋事蹟上之”，『元史』卷九「世祖本紀」“[至元十三年六月]戊寅，詔作平金，平宋録，及諸国臣服伝記，仍命平章軍国重事耶律鑄監修国史”。

『后妃伝』、馬祖常の翻訳した『列后金鑑』の原本、あるいはトプチャンそのものからの抜粋かもしれない。

以上、簡単に見てきたように、李氏朝鮮において用いられたモンゴル語の教科書も、本来はすべて大元ウルスの朝廷において編纂、高麗王家に伝えられたものであった。これらの書物のほかに、モンゴル語の『老乞大』も教材として挙げられており、出処はおそらく同じだと考えられる。これが旧本『老乞大』の原本にほかならないだろう。なお、こんにち伝わる『蒙語老乞大』は、英祖十四年(1741)に蒙学官の李最大が編み、そのご英祖四十二年(1766)に李億成が改訂、正祖十四年(1790)に刊行されたもので、『経国大典』所載のテキストとは別物である。

『世宗実録』、『経国大典』によれば、倭学に於いても日本語版の『老乞大』がテキストとして使用されたが、日本語を学ぶテキストの書名にまで、モンゴル語 *Khitai* を冠するのは、明らかにおかしい。大元ウルスと高麗王家との深い関わりも併せて考えるならば、モンゴル語の『老乞大』がまず編纂され、そこから漢語訳、日本語訳が作成されたと考えるのが自然である。旧本『老乞大』の漢語は、本来はモンゴル語に付された傍訳に過ぎなかった可能性すらある。ちょうど『華夷訳語』、『元朝秘史』のように。じじつ、天理大学附属図書館には、パスパ字モンゴル語に口語の語彙をもって傍訳を付した元刊本の破片が蔵される[田中 1962, p. 190, 照那斯図 1991, pp. 212-215]。

これまで「漢児言語」の例としてとりあげられてきた資料——『元典章』や『孝経直解』、明太祖の聖旨、勅諭は、じつはすべてモンゴル語の翻訳であった。華北の諸民族共通の口語などではなかった。少なくともモンゴル以前の中国北方にもともとあった共通語「漢児言語」を基礎として直訳体ができたのでは断じてない。モンゴルが人工的に作り出した直訳体があってはじめて、旧本『老乞大』の言語があるのである。

七. 旧本『老乞大』—— むすびにかえて

さいきん、『元朝秘史』、『華夷訳語』（甲種本）のモンゴル語の全単語および語尾の索引を公刊した栗林均は、これらの精確なデータをもとに、モンゴル語と漢語傍訳の対応関係を見直し、洪武年間の翻訳のノウハウを明らかにしつつある。そして、『元朝秘史』における第一人称，第二人称代名詞の漢語傍訳の法則が旧本『老乞大』にも概ね当てはまることを指摘した。すなわち

| | 単 数 | 複 数 | |
|------|-----|--------------------|------|
| | | 排除式 | 包括式 |
| 第一人称 | 我 | 俺 | 咱，咱每 |
| 第二人称 | 你 | 您（『元朝秘史』），恁（『老乞大』） | |

という図式である〔栗林 2003a〕。また、旧本『老乞大』に多数見える“那般者”が金文京，佐藤晴彦等が訳した“それなら”という意味ではなく〔金・玄・佐藤・鄭 2002〕、『元朝秘史』の承諾，許可を表す *je* ときちんと対応していることも，一例として挙げられた〔栗林 2003a, pp. 17-18〕。こうした『元朝秘史』の傍訳との共通点も，旧本『老乞大』がモンゴル語から翻訳されたテキストである可能性を示唆するだろう。

これに対し，佐藤はモンゴル語の傍訳にすぎないデータの集積と分析は漢語の研究には無意味であり，また論証の方法，例の挙げ方が公正でないとして猛然と批判を加えた〔佐藤 2003〕⁽⁶⁴⁾。だが，そうした発言は，旧本『老乞大』をあくまで中国固有の言語たる“漢児言語”として捉え，モンゴル語直訳体の可能性を全く認めていないからである。『華夷訳語』，『元朝秘史』のモンゴル語と漢語の

(64) 当該論文は，2002 年 11 月 5 日大谷大学で開催されたシンポジウム「モンゴルの出版文化」で栗林が発表，配布した「プログラム予稿集」に対する反論として，2003 年 3 月の栗林論文公刊をまたず 2003 年 1 月の段階で書かれている。なお，佐藤は「おわりに」の部分で，“これ以上不毛な議論を継続したとしても生産的な議論は期待できず，時間，紙の無駄”として，“この問題についてこれ以上コメントするつもりはない”と述べ，こんご予想される論争をシャットアウトしてしまっているが，敢えてとりあげておく。

バイリンガルの長大な合璧資料の分析は、『元典章』をはじめとする一連の直訳体資料の研究には必須かつ有意義な基礎研究であり、むしろこれまで手がつけられていなかったことのほうが問題とさえいえる。たしかに、旧本『老乞大』のなかには、栗林によって提出された人称代名詞の図式がうまくあてはまらない箇所もわずかながら存在するが、たとえば

主人家送不得時、咱每伴當裏教一箇自爨内(主人、間に合わないなら、連れの一人に肉を炒めさせようか?) [金・玄・佐藤・鄭 2002, p. 73]

と訳されている部分は、“主人家^{ごしゅじん}が送^{まにあわない}不得時^{おれたちなかま}には、咱^{うち}每伴當^{ひとり}の裏^しで一箇^{かし}を教て自ら肉を爨^{かし}がせよう”と、主人へ向って発されたことばではなく、仲間内での相談、発言と考えれば、矛盾なく解決するように、いったんこの図式を以って訳しなおしてみることも必要だろう。その作業によって、各場面の情景、展開が、思いもかけない方向からのスポットライトを浴び、生き生きと目前に浮かび上がってくることも多い。

“『老乞大』、『朴通事』が多く蒙古の言を帯び、純たる漢語に非ざる”ことは、つとに李辺が述べ、じっさい旧本『老乞大』の発見以来、モンゴル語からの音訳、翻訳と考えられる単語について、つぎつぎと報告がなされている[鄭・梁・南・鄭 2000, 陳 2002]。ここでは、一々取り上げないが、たとえば

這裏到夏店演裏有十里来地、到不得也 [13 葉裏 1 行目]。

這裏到那裏演裏有七八里路 [17 葉表 7 行目]。

という2つの文の“演裏”という語は、のちに“還”に改められることから、「まだ」「さらに」というニュアンスをもつことが推定される。しかし、管見の限りでは、同時代の漢語資料の中には用例が見当たらない。金・佐藤等もこれがモンゴル語の音写である可能性を認め、「あまる」という動詞から「さらに」の意味をもつ *ileu* を候補にあげている[金・玄・佐藤・鄭 2002, p. 382]。あるいは、『華夷訳語』『詔阿札失里』5b 2, 「勅僧亦隣真臧卜」10b 2, 『元朝秘史』卷八 20a 5 の“額兀 舌里 *e' uri* : 久, 久遠”なども候補に挙げられるかもしれない。

崔世珍(1467～1542)は、旧本『老乞大』に使用されている句末の“有”について、“元の時の語．必ず言の終わりに於いて「有」の字を用い、語助の如くして、而れども実は語助に非ず．今の俗は用いず”と述べた．しかし、これは、崔世珍が司訳院、承文院で使用されている数多の大元時代の刊行物に記される直訳体の文を読んでそう理解していたということに過ぎない．当たり前のことだが、かれ自身は大元時代に話されていた漢語をじっさいに聞いたことはなかったのである．かれの発言に依拠し、モンゴル時代の言語を考えるのは、本末転倒というものだろう．崔世珍はすぐれた研究者であったが、『朴通事集覽』上の「南城」の解説に“大元は燕京を以って大都と為す．俗に南城と号す．開平府を以って上都と為す．俗に北城と号す”と書いてしまうように、完璧ではなかった．南城は大都のすぐ南の旧城すなわち金の中都を指し、北城が新都すなわち大都である．

なお、旧本『老乞大』の内容についていえば、高麗王朝公認の商人と高麗の投下領でもある遼陽の漢人商人の大都までの道中記、滞在記といってよい．しかし30葉裏9行目から35葉表2行目までの約4葉余りは、良家の子弟に対する一種の処世訓であり、会話体の形式をとらず、前後の話が繋がらない．原本『老乞大』にあとから挿入されたものと考えられるが、この部分は、より『元典章』、『孝経直解』等の直訳体資料の言い回しと酷似しており、モンゴル語原文の存在を強烈に感じさせる．

大概人の孩兒、從小來好教道的、成人呵、官人前面行也者．他有福分呵、官人也做也者．若教道他不立身成不得人也是他的命也者．咱每為父母心尽了、不曾落後．你這小孩兒、若成人呵、三条道兒中間裏行者．別人東西休愛者．別人析針也休拿者．別人是非休說者．若依著這般在意行呵、不揀幾時成得人也者．常言道「老實常在、脫空常敗」．休做賊說謊．休奸滑懶惰．官人每前面出不得氣力行呵、一日也做不得人有．

大概、人的孩兒は、小^{のこども}さき從來^{より}好く道を教えた^{もの}的は、成人した呵、官人^{ノヤン}の前面^らで行^{だろ}う也者．他に福分^{かれ}が有^らった呵、官人^{ノヤン}に也^も做^なる也者^{だろ}う．若し道を教え

かれ ても それ かれの だらう われら た
 て 他が立身せず人に成り得なくて 也是は他的命也者。咱每父母為るは心を
 て 尽し了、曾て なのがり なんとこ こわっ ぼ
 落後にならず。你這の小孩兒よ、若し成人した呵、三条の道兒
 うち え もの あいする な もとる な
 の中間の裏を行者。別人の東西は休愛者。別人の析れた針也休拿者。別
 う な このよう ら いつであつても
 人の是非は休説者。若し依著して這般に在意して行つた呵、不揀幾時人
 だらう ことわざ い まじめ ふまじめ
 と成り得る也者。常言にも道う「老実は常に在り、脱空は常に敗す」。
 あくじをはたらいたりうそをつく な ずるをしたり なまける な ノヤン たち ちから
 休 做 賊 説 説。休 奸 滑 懶 惰。官人毎の前面で氣力を出し得ず行つ
 ら も
 た 呵、一日也人と成り得ないので有る。

また、本書の漢人商人が涿州に売りにいく商品、高麗商人が購入して帰る商
 品が、ふつうの品々ではない。馬具、弓矢、刀、漆塗りや磁器の皿、罽毘と呼
 ばれるモンゴル王族・官僚の貴婦人がかぶる帽子、『四書集注』をはじめとする
 書籍、正一品・二品といった高官たちが着る純金の模様入りのナシシュ、珊瑚
 や瑪瑙・琥珀などのアクセサリー。高麗王や宰相が庇護者である可能性が極めて
 高い。また、羊を賭けて弓試合を開いたり、宴会の最後に肉を刀で切つてし
 めくくするなど、モンゴルとの交流も窺える。

『老乞大』といくつか類似の話を載せる『朴通事』では、モンゴル朝廷、高麗王
 朝との関わりがさらに濃密に窺える。主人公のひとり、しばしば詔書の開読
 に派遣される官僚で、金字のパイザを持っておりジャムチも利用できる。旅行
 で江南の四明沖の南海普陀落迦山の観音を参拝に出かけたり〔宮 2004, pp. 52-
 54〕、高麗の高僧の説法を聞きにも行く。流行の衣服、意匠を凝らした小道具に
 身を包み、大邸宅も借りている。光祿寺、内府から酒を支給してもらい豪華な
 宴会を設え、教坊司の楽工に院本や雑技を演じさせることができ、モンゴルの
 曲を歌い、笛を吹く。カアンの上都、大都両京の移動にも随行する。隆福宮の
 西にある棕毛殿の側で弓の競射にも参加し、聖節日に大明殿の前で開催される
 モンゴル相撲を百官とともに見物したり、宮苑内の聖なる空間として囲まれた
 湖の周辺の散策も可能な身分である。

田村祐之も一連の訳注、研究で述べるとおり、この書の成立にモンゴル人、
 もっといえばモンゴル官僚、高麗王をはじめとするケシクの一員が関わってい

る可能性がきわめて高い。モンゴル朝廷のシステム、宮中の様子、風俗等、自分で見聞し、知っていないと書けない記述が多いからである。

なお、旧本『朴通事』の最終的な完成は、じゅうらい指摘されていないようであるが、至正十二年／高麗恭愍王元年（1352）以降と見られる。それは、『朴通事諺解』に

曹大家裡人情来麼？甚麼人情？却不没老曹来。我不曾知道来，出殯也麼？今早起出殯来。今年纔三十七歳。咳，年紀也小裡。留幾日来？三来。陰陽人是誰？朱先生来。殃榜横貼在門上，你過來時節不曾見？我不曾見。写着甚麼裡？写着：壬辰年二月朔丙午十二月丁卯，丙辰年生人，三十七歳，艮時身故，二十四日丁時殯，出順城門……

という会話があり、この壬辰は、これまで『朴通事』の成立年代の根拠となってきた書中の一記事、すなわち高麗の和尚、法名歩虚が江南の石屋和尚の衣鉢を継いで、カアンのジャルリクのもとに、南城永寧寺で説法を行った至正七年（1347）よりあとのこと、と考えられるからである。つまり、この死者は、延祐三年（1316）⁽⁶⁵⁾生まれ、至正十二年（1352）に数えの三十七歳で逝去したことになる。

いっぽう、旧本『老乞大』の第39葉表10行目には、

你与我看命。你說将年月日生時来。我是属牛兒的，今年四十也。

とあり、この運勢を見てもらっている高麗人が皇慶癸丑二年（1313）生まれの四十歳だとすると“今年”はやはり至正十二年、恭愍王即位の年（1352）となる。これは果たして偶然なのだろうか。

(65) 『朴通事諺解』に“南城永寧寺聽說仏法去来。一箇見性得道の高麗和尚、法名喚歩虚、到江南地面石屋法名の和尚根底、作与頌字、迴光反照、大發明得悟、拜他為師傅、得伝衣鉢。迴来到這永寧寺裏、皇帝聖旨裏、開場說法裏……”とあり、『朴通事集覽』巻上「歩虚」は『高麗史』等の資料をもとに、“俗姓洪氏。高麗洪州人。法名普愚。初名普虚、号太古和尚。有求於天下之志。至正丙戌春入燕都。聞南朝有臨濟正脈不斷、可往印可、蓋指臨濟直下雪岳嫡孫石屋和尚清珙也。遂往湖州霞霧山天湖庵。謁和尚嗣法伝衣、還大都。時適丁太子、令辰十一月二十四日奉伝聖旨、住持永寧禪寺、開堂演法。戊子東還。掛錫于三角山重興寺、尋往龍門山結小庵、額曰小雪。戊午冬示寂、放舍利玄陵、賜諡圓證国師。樹塔于重興寺之東、以藏舍利玄陵、即恭愍王陵也”と解説する。

そして、恭愍王が前年九月の大元ウルスの詔をうけて即位したこの至正十二年の五月には、『朴通事』のほかならぬ高僧歩虚を招聘するのである〔『高麗史』卷三八「恭愍王世家」〕。そのごも、恭愍王はもとよりモンゴルから彼に降嫁した魯国大長公主ブダシリ等は、歩虚を寵愛、内殿までにも迎え入れる〔『高麗史』卷八九「后妃伝」〕。はては洪武十一年／辛禍四年(1378)に示寂した歩虚の舍利は、恭愍王の御陵に置かれたのであった〔『朴通事集覽』卷上「歩虚」〕。

当たり前のことながらモンゴルの駙馬国として久しい高麗の恭愍王は、モンゴル名をバヤン＝テムルといい、自身、純モンゴルにかぎりなく近い血が流れていた。即位前はトゴン＝テムルのケシクに入っており、倭百遼遜とは大元ウルス朝廷のアユルシリダラ皇太子の教育所である端本堂以来の知り合いであった。モンゴル語の教科書は、容易に得ることができ、またじっさいにそれらの書物を諸王子、貴族の子弟とともに学びモンゴル語で意見を交わし、様々な競技や観光とともに楽しんでいたのである。ブダシリも、即位する夫とともに、これらの書物や奢侈品を携え、最新のファッションに身をつつみ大勢の官僚、侍女を従えて、高麗にやってきた。いっぽう、トゴン＝テムルのカトンで、アユルシリダラの生母のオルジェイ＝クトクすなわち奇氏は、高麗王室の権臣奇轍の妹なのであった。そして彼女もまた、かつてのサンガラギ(武宗カイシャンの妹、仁宗アユルバルワダの姉)のごとく、『女孝経』や史書に載るすぐれた歴代皇后の逸話集を学ぶ姿勢を見せ、文化事業に熱心であった〔『元史』卷一一四「后妃伝」〕。

恭愍王からすれば、アユルシリダラより自分のほうがよほどモンゴルの貴種であり、のちの大元ウルスからの独立、反抗と見られている行動も、アユルシリダラ母子との権力争いの観点から、あるいはココ＝テムル等有力なモンゴル諸王の動きと同じレヴェルで見たほうがよいが、とにかく至正十二年頃は、大元ウルス朝廷と高麗王室の渾然一体化が最高潮に達した時期であった。両国を行き交う空前絶後の人とモノの流れ、その緊密な関係を象徴するかのごとく、言語の習得はもとより、大元ウルス治下の文化、経済などの予備知識の獲得、理解の一助となる『老乞大』と『朴通事』の二書は、おそらく両王室の協力のもとに編纂された。

さらに、この壬辰の年こそは、大元ウルスにとって、前年からの紅巾の乱、方国珍・張士誠の叛乱によって、江南からの海運が不通になった大変な年でもあった[宮 2004, p. 13]。高麗との関係を固めておく必要は以前にも増して強まっていた。とすれば、この二書もまたきわめて政治的な記念刊行物であったことになる。

ところで、モンゴル時代の直訳方法、“～的上頭”に代表される「翻訳」言語は、清朝の時代にもうかがえる。清の皇帝は、モンゴルのカアンとしての顔ももった。

モンゴルの伝統と記憶は、断絶していなかった。「翻訳」言語は、『清文啓蒙』、『清語四十条』、『清語易言』、『清文指要』などおもに満洲語の教科書のことどころに現れた——たとえば、乾隆三十一年、鑲黃旗蒙古歩軍統領衙門主事の博赫(Behe)が編輯した『清語易言』では、“eici alaradeo(あるいは告げられたことによるのか)”に“或者告訴的上頭麼”を、“alara jakade(告げることのために)”に“告訴的上頭”の訳を与える——。その対訳、傍訳としての漢語は、もとの満洲語の語順に即したもので、それだけで読めば、おなじ時代の口語の小説に見える漢語と、語順・語法ともに異なる。そうでなければ、“Manju gisun i oyonggo jorin i bithe”『清文指要』(満洲語の会話教科書 Tanggu meyen『一百条』を再編集し、満文に漢語傍訳を施したもの)の漢語の部分が、応龍田とトマス＝ウエイドによって大幅に改訂される必要もなかっただろう[高田 2001, p. 138]。

清朝は、さまざまな意味で内にモンゴルを有する国(グルン)であり、皇族、旗下の子弟はモンゴル語が、モンゴル子弟は満洲語が出来てあたりまえ、だった。⁽⁶⁶⁾じじつ、満漢合璧をはじめ、満、蒙、蔵、漢、さまざまなとりあわせの碑文、典籍が膨大に生み出された。ロシアをはじめ、同時代の世界各国でもモンゴル時代の外交文書、命令文のシステムは、いくばくかの変貌を経つつも継承されていた。⁽⁶⁷⁾

(66) 呉振棫『養古齋叢録』巻四“我朝家法，皇子皇孫六歲即就外傳讀書，寅刻至書房，先習滿洲，蒙古文序，然後習漢書”，『滿蒙漢會話書』(京都大学文学部蔵)“旗下蒙古不甚分別，旗下人會說蒙古話，蒙古人會說滿洲話，凡事上都有益”。

(67) 杉山 2003, 杉山 2004, p. 22 参照。なお、『龍沙紀略』によれば、ロシアのチャガン・カンから清朝康熙丙申(1716)に送られてきた来文二函も、一通は彼の国の文字であったが、もう一通は、蒙古字であったという。これはいうまでもなく、ジョチ・ウルス以来の伝統である。

が、清朝は、モンゴルのように、システム化された直訳体を文書として普及させようとはしなかった。漢字文化圏についていえば、口語の語彙をもって翻訳しても、満洲語の構造を前面に押し出す徹底さはなかった。それよりも、北京を中心とする北方音による中国語の規範化に向けて力をそそいだのであった。

文献表(下)

- 石田幹之助1931:「女真語研究の新資料」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』京都、弘文堂書房、pp. 1271-1323。(のち『東亜文化史叢考』東京、東洋文庫、1973、pp. 3-69 に収録)
- 1944:「所謂三種本『華夷訳語』の『韃靼館訳語』」『北亜細亞学報』2、pp. 35-87。(のち『東亜文化史叢考』東京、東洋文庫、1973、pp. 147-205 に収録)
- 河内良弘 1997:「明代女真の外交文書について」『東方学会創立五十周年記念東方学論集』東京、東方学会、pp. 457-472.
- 2000:「朝鮮王国の女真通事」『東方学』99、pp. 1-15.
- 金文京・玄幸子・佐藤晴彦・鄭光
- 2002:『老乞大——朝鮮中世の中国語会話読本——』(東洋文庫)東京、平凡社。
- 栗林均 2003a:「『元朝秘史』におけるモンゴル語と漢語の人称代名詞の対応」『東北アジア研究』7、pp. 1-32.
- 2003b:『『華夷訳語』(甲種本)モンゴル語全単語・語尾索引』仙台、東北大学東北アジア研究センター叢書 10.
- 栗林均・碓精扎布
- 2001:『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』仙台、東北大学東北アジア研究センター叢書 4.
- 佐藤晴彦 2003:「栗林均氏の批判に答える——氏の「『元朝秘史』におけるモンゴル語と漢語の人称代名詞の対応」をめぐって」『開篇』22、pp. 137-143.
- 杉山正明 1982:「圖王チュベイとその系譜——元明史料と『ムイッズルーアンサーブ』の比較を通じて」『史林』65-1、pp. 1-40。(のち 杉山 2004、pp. 242-287 に収録)
- 1983:「ふたつのチャガタイ家」小野和子編『明清時代の政治と社会』京都、京都大学人文科学研究所、pp. 651-700。(のち 杉山 2004、pp. 288-333 に収録)
- 2003:「モンゴル命令文の世界——ヴォルガからの手紙・ローマへの手紙」(3月20日、日中韓版本研究会、6月21日、京都大学文学研究科21世紀COEプログラム「東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究」第三回研究会。要旨は <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/asorder/meetings3-01.html> に8月7日より公開)
- 2004:『モンゴル帝国と大元ウルス』京都、京都大学学術出版会。

- 高田時雄 2001 : 「トマス・ウェイドと北京語の勝利」 狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』京都, 京都大学学術出版会, pp. 127-142.
- 田中謙二 1962 : 「『元典章』における蒙文直訳体の文章」『東方学報』32, pp. 187-224.
- 田村祐之 1996a : 「訳注『朴通事諺解』」『火輪』創刊号, pp. 8-17.
- 1996b : 「『朴通事諺解』翻訳の試み」『饗餐』4, pp. 57-91.
- 1997a : 「訳注『朴通事諺解』(2) —— 女の口説き方 ——」『火輪』2, pp. 16-26.
- 1997b : 「『朴通事諺解』試訳(3) —— 季節の遊び ——」『火輪』3, pp. 2-16.
- 1997c : 「『朴通事諺解』翻訳の試み(2)」『饗餐』5, pp. 60-93.
- 1998a : 「『朴通事諺解』試訳(4) —— 破戒和尚 ——」『火輪』4, pp. 27-40.
- 1998b : 「『朴通事』の職業」『火輪』5, pp. 9-15.
- 1998c : 「『朴通事諺解』翻訳の試み(3)」『饗餐』6, pp. 46-72.
- 1999 : 「『朴通事諺解』翻訳の試み(4)」『饗餐』7, pp. 28-46.
- 2000 : 「『朴通事諺解』翻訳の試み(5)」『饗餐』8, pp. 8-28.
- 2001a : 「旧本『老乞大』と『翻訳老乞大』との異同について」『姫路独協大学外国語学部紀要』14, pp. 248-259.
- 2001b : 「『朴通事諺解』翻訳の試み(6)」『饗餐』9, pp. 8-34.
- 2002a : 「『朴通事』と日用類書の関係について」『姫路独協大学外国語学部紀要』15, pp. 223-241.
- 2002b : 「『朴通事諺解』翻訳の試み(7)」『饗餐』10, pp. 8-25.
- 寺村政男 1998 : 「『高麗史』に記録された明太祖の言語の研究 —— その1 ——」『語学教育研究論叢』15, pp. 211-231.
- 西田龍雄 1970 : 「西番館訳語の研究」京都, 松香堂.
- 船田善之 1999 : 「『元典章』読解のために —— 工具書・研究文献一覧を兼ねて ——」『開篇』18, pp. 113-128.
- 2001 : 「元代史料としての旧本『老乞大』 —— 鈔と物価の記載を中心として」『東洋学報』83-1, pp. 1-30.
- 2003 : 「蒙元時代公文制度初探 —— 以蒙文直訳体的形成与石刻上の公文为中心」『蒙古史研究』7, pp. 125-137.
- 本田實信 1963 : 「『回回館訳語』に就いて」『北海道大学文学部紀要』11, pp. 224-150. (のち『回回館訳語』として『モンゴル時代史研究』東京, 東京大学出版会, 1991, pp. 457-533 に収録)
- 宮紀子 2002 : 「大元ウルスの言語資料と出版文化」京都大学大学院文学研究科博士論文.
- 2003 : 「『対策』の対策 —— 大元ウルス治下における科挙と出版」『古典学の現在』5, 文部科学省特定領域研究「古典学の再構築」領域横断研究「日中韓版本研究会」pp. 5-126.
- 2004 : 「『混一疆理歴代国都之図』への道 —— 14 世紀四明地方の『知』の行方 ——」『絵図・地図からみた世界像』京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「15・16・17 世紀成立の絵図・地図と世界観」pp. 3-130.
- 山崎忠 1955 : 「華夷訳語彙輯館来文の研究 資料編 —— ベルリン本と東洋文庫本との異同 ——」ユーラシア学会編『遊牧民族の研究』京都, 真陽社, pp. 137-147.

北京圖書館金石組（北圖）

1990：『北京圖書館藏歷代石刻拓本匯編』第51冊，鄭州，中州古籍出版社。

陳高華 2002：『旧本『老乞大』書后』『中國史研究』1，pp. 123-130。

福建省泉州海外交通史博物館（泉州）

1984：『泉州伊斯蘭教石刻』福州，寧夏人民出版社·福建人民出版社。

國立故宮中央博物院聯合管理處（故宮）

1956：『故宮書畫錄（下）』台北，台灣書店。

賀雲翱·狄富保

2000：『元『合剌普華臺誌銘』考釈』『南方文物』2000-1，pp. 92-100。

胡振華·黃潤華

1981：『明代文獻 高昌詔語』烏魯木齊，新疆人民出版社。

黃時鑑 2001：『元高昌侯氏入東遺事』蕭啓慶主編『蒙元的歷史與文化 蒙元史學術檢討會論文集下冊』台北，學生書局，pp. 541-569。

李基文 1967：『蒙學書研究』基本問題』『震壇學報』31，pp. 91-113。

李泰洙 2003：『《老乞大》四種版本語言研究』北京，語文出版社。

李逸友 1991：『黑城出土文書（漢文文書卷）』北京，科學出版社。

劉堅·蔣紹愚

1995：『近代漢語語法資料彙編 元代明代卷』北京，商務印書館。

留金鎖 1981：『十善福白史冊』呼和浩特，內蒙古人民出版社。

劉迎勝 1996：『古代中原與內陸亞州地區的語言交往』『學術集林』卷7，上海遠東出版社，pp. 167-203。

朴現圭 1996：『回紇人撰述的『近思齋逸稿』之發掘分析』『民族文學研究』1996-2，pp. 89-93。

石守謙·葛婉章

2001：『大汗的世紀——蒙元時代的多元文化與藝術』台北，國立故宮博物院。

宋峴 2000：『回回藥方考釈』北京，中華書局。

烏·滿達夫

1998：『華夷詔語』海拉爾，內蒙古文化出版社。

西藏自治區檔案館（西藏）

1995：『西藏歷史檔案薈粹』北京，文物出版社。

亦鄰真 1987：『《元朝秘史》及其復原』『元朝秘史（畏吾體蒙古文）』呼和浩特，內蒙古大學出版社，pp. 73-108。

張鴻勳 1986：『《孔子項託相問書》故事傳承研究』『一九八五年全國敦煌吐魯番學術討論會論文專輯』蘭州，蘭州大學出版社，pp. 194-206。

照那斯圖 1991：『八思巴字和蒙古語文獻Ⅱ 文獻匯集』東京，東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所。

照那斯圖·宣德五

2001：『訓民正音和八思巴字的關係研究——正音字母來源揭示』『民族語文』2001-3，pp. 9-26。

- 鄭光 1988:『司訳院倭学研究』ソウル, 太学社.
- 鄭光・尹世英
1998:『司訳院訳学書冊板研究』ソウル, 高麗大学校出版部.
- 鄭光・梁伍鎮・南權熙・鄭丞惠
2000:『{原刊}「老乞大」研究』北京, 外語教学与研究出版社.
- 中国蔵学研究中心・中国第一歴史档案館・中国第二歴史档案館・西藏自治区档案館・四川省档案館(蔵学档案)
1994:『元以来西藏地方与中央政府関係档案史料匯編』第一冊, 北京, 中国蔵学出版社.
- 祖生利 2003a:『元代文献中“一般”和“也者”的特殊用法』『民族語文』2003-6, pp. 28-34.
2003b:『《元典章・刑部》直訳体文字中的特殊語法現象』『蒙古史研究』7, pp. 138-190.
2004:『元代直訳体文献中的原因后置詞“上／上頭”』『言語研究』24-1, pp. 47-52.
- Cleaves, Francis Woodman
1950: The Sino-Mongolian Edict of 1453 in the Topkapi Sarayi Müzesi, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 13, pp. 431-446 + 8 pls.
- Finch, Roger
1999: Korean Hankul and the ḥP' ags -pa script, *Writing in the Altaic World, Studia Orientalia*, 87, Helsinki, pp. 79-100.
- Haenisch, Erich
1952: *Sino-Mongolische Dokumente vom Ende des 14. Jahrhunderts*, Berlin, Akademie-Verlag.
1957: *Sinomongolische Glossare I: Das Hua-I ih-yü*, Berlin, Akademie-Verlag.
- Hoog, Constance
1983: *Prince Jiñ-Gim's Textbook of Tibetan Buddhism: The Śes-bya rab-gsal (Jñeya-prakāśa) by 'Phags-pa Blo-gros rgyal-mtshan dPal-bzañ-po of the Sa-skya-pa*, Leiden, E. J. Brill.
- Kiyose, Gisaburo Norikura
1977: *A Study of the Jurchen Language and Script*, Kyoto, Horitsubunka-sha.
- Mostaert, Antoine & Igor de Rachewiltz
1977: *Le matériel Mongol du Houa I I lu 華夷譯語 de Houng-ou (1389), I*, Bruxelles, Institut Belge des Hautes Études Chinoises.
1995: *Le matériel Mongol du Houa I I lu 華夷譯語 de Houng-ou (1389), II: Commentaires*, Bruxelles, Institut Belge des Hautes Études Chinoises.

[付記] 本稿は、文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励金, 若手研究(B))による研究成果の一部である。